
B&B 第0章 五章中編

因幡素兎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

B & a m p ; B 第0章 五章中編

【Nコード】

N 6 2 4 5 I

【作者名】

因幡素兎

【あらすじ】

マコトの見ていた夢の秘密が明かされる。

大丈夫。人が記憶を忘れるのは単に生理現象というわけでもない。沈黙の思考とでも言いましょうか、無意識というものがあり、彼がえてして防御本能によりショックを無感覚の記憶として麻酔を打つて隠してしまうことがあるのです。それも一つの忘却というものなのです。

右も左も分らない暗闇の中。どこか遠くでそんな言葉が響きを小さくしていきながら消えていった。

/ 1

そう、それは俺がまだ小学校六年生になったばかりの六月。やつとセミがかすかに鳴き始めたばかりの季節の変わり目。

俺は彼女と出会った。

カナカナカナ・・・カナカナカナ。

ヒグラシが鳴いている。雄のヒグラシは高く美しい鳴き声で羽をならす。セミの仲間の中では平均的に見て、早い時期より鳴き始め早く鳴き終わる。

以前、理科の授業で近くの雑木林へ行ったとき、誰かがそう教えてくれたのを思い出す。

いつも通う登校の道のり、学校に近づけば近づくほど登校途中の同年代の喧噪な歩行が道を騒がす。隣で友人達がたわいもないスポーツの話題で高揚した声を弾ませていた。

そんな中、俺は一人違うところを見ていた。

子供の泣き声が聞こえる住宅街。通学途中の騒がしい歩道。道なりの街路樹。セミの鳴く声……。どれも見知った光景。

五人組。その輪の中にあって俺は最近、どうも退屈な心境に陥っていた。

以前までは楽しかった友達との会話も、なんだか味気なく色あせた灰色の背景音のように興味がわかない。

「な、マコっちゃんもそう思うべ。」

なんの話題だろう……。なにがそんなに楽しいのか笑いを浮かべる友達の貌を眺めて俺は何の感慨も浮かばない。突然話を振られて正直よく分からないまま適当に相づちを打った。

見飽きた顔ぶれ。見飽きた通学路。退屈だ……。とにかく何もかも面白いと感ぜられない。いや、別段全てが見え透いてしまっているという訳じゃないんだ……。ただ、意味もなく興味というものを沸かせてもらえる者を俺は探していたのかもしれない。

早く学校に到着したい。どうせこうやってみんなと話していてもなんの感慨も浮かばないなら、早く学校についてバスケでもして何も考えず汗を流していた方がよっぽど有意義だ……。

なんでだろう……。俺はこの歳でもう、生きることには飽きてきているのかもしれない……。

失踪同然で外国へ行ってしまうって丸一年帰ってこない夫をただひたすら待ち続ける母……。そんな家庭に育てば誰だってこんな虚無感に襲われるのかもしれない……。

何か良いことないかなあ……。

ふと、青く日差しを一面に広げる空を見上げてそう思った時だった……。俺の目線の、その横目に赤いランドセルの一人の少女が映ったのは。

誰もがガヤガヤと歩き直つ直ぐ学校へ向かう道のりの途中、一人だけ道ばたに座り込んでいる彼女は滑稽だった。

だからだろう……。俺は何か見えない糸に惹かれるように彼女に向かって歩を進めていた。

少女が屈んでいたのは別にお腹が痛いとかそういった理由ではないようだった。後ろ姿だけしか見えていないが彼女は別に震えてるわけでもお腹を抱えているわけでもない。

彼女は何かを見ていた。屈んでのぞき込むような小さな何か。道を通る生徒達の数人も彼女の見るそれをのぞき込むと苦い顔を浮かべてそそくさと歩いていつてしまった。

何を見ているのだろうか？そしてこの子はどうしてこんなに綺麗な髪をしているのだろうか・・・。

赤いランドセルに飾り付けのように被さる後ろ姿のロングヘアーは今まで俺が見たこともないような漆黑とした黒髪だった。痛んだ毛など一本もない見事な直毛。艶やかでみずみずしいソレはまるで流れる黒い水のようなだった。

「ねえ・・・キミ何見てるの？」

俺は知らず後ろから訪ねていた。少女は振り返らない。少し間を置いてから

「終わりを眺めてるのよ。」

そんな返事だけが涼風のような透き通った声で届けられた。

俺はその見てるモノもみたいと思ったが、それ以上にその少女のきつと見とれるような貌を見てみたいと思った。

そして隣に座った。ドキドキした・・・こんな心がワクワク高揚するのは初めてかもしれない。

しかし、すぐに俺の心はおぞましい気持ちに染め上げられた。

いや、少女の貌じゃない。その前に俺の目に映ったそれが・・・あまりにも無残な形をしていたからだった。

デカイ・・・そして確実に息をしていない。潰れたドブネズミ・・・。

一言で言えばそうだった。それは頭を必死でどぶ川のフタの小さな隙間にねじ込もうと逃げ込むのに努力した体制で、グチャリという効果音が聞こえてきそうなほど無残な姿で死んでいた。体長二十センチほどのネズミの内蔵がはらわたを突き破り飛び出している。

貌の下半分もグチャグチャにつぶされてコンクリートの地面には黒っぽい血痕がしみこんでいた。

灰色の毛につつまれた挽肉のかたまり……。それがネズミの死の客観的な見た目だった。

「車にはねられたのかな……。」

呟くと少女はクスリと笑ってやつと俺に振り向いた。そして同時に俺は息を飲み込むような感動を感じた。ネズミの死骸でおぞましく染め上げられた心が一瞬にして浄化された。この世にこれほど整った顔をした人間がいるのだろうか？そう思うくらい彼女は美しい貌をしていた。

その透き通る涼風同然の声色、黒絹を彷彿させる直毛。そのどれも兼ね備えて十分に相応しい美少女だった。

「あなたそんな事が気になるの？」

はてな？少女はその粉をまぶしたような白い肌とは正反対に黒い瞳を笑わせながら俺をバカにするように言った。

「どうやって死んだとか……。どんな理由でこんな姿をしてるか……。そんなことすぎてしまえばどうでも良い事じゃない。」

莫迦ね、とそう嘲笑すると彼女は信じられないことにそのネズミの死体に手を伸ばした。その死体を地面から剥がすと胸に優しく抱いた。まるで道ばたで拾った子猫を抱きかかえるように平然と彼女はネズミの死骸をどこかへ持ち去る。

俺は強く興味をそそられた。

「おいっ！マコちゃん。なにやってんだよ。早く来いよ。」

後ろの方でそんなどうでもいい声が俺を呼んでいたような気もしないでもない。しかし、俺は振り返ることもなく少女の後に付いていった。

彼女は別段そんな俺を邪魔にする風もなかった。でも俺に対して興味がある風でもなかった。

彼女がネズミの死骸を持って行ったのは近くにある小さな公園だった。そこにはバケツ型のまた公園同様小さなゴミ箱があって、彼

女はそのゴミ箱へ徐にネズミの死骸を投げ入れてしまった。

「え？捨てるの？」

思わず疑問が口を開いた。正直、生き物の死骸をどうやって処分するのか俺には分からなかったが、どこか心の奥で公園の地面にでも埋めてあげるモノだと信じきっていた。

「当たり前でしょ。ゴミはゴミ箱に捨てなきゃ。ママに怒られるわ。」

彼女はまたおかしな事を言うつとフフと鼻で笑いながら平然と俺を横目に見た。

「そのネズミが・・・嫌いだったの？」

俺は彼女に近寄り自然と訪ねた。ゴミ箱の中に投げ入れられたその死骸を眺めながら、彼女がどうしてそんな風に笑ってられるのか理解不能だった。

「こんな汚いものが好きな人がいて？」

彼女は静かにそして淡々と答える。

「それがこうしてたわいもない命を終わらせた姿を見て、愉悦に感じない人なんているのかしら？」

彼女はニヤリとご機嫌に笑みを浮かべてゴミ箱の中のネズミの死骸をもう一度のぞき込むと

「ほら、見てこの飛び出した臍物・・・素敵じゃない・・・。」

と実に嬉しそうに言った。

それが俺と彼女の最初の出会いだった。

「ねえ、マコト、さっきなんで早く来なかったのさ。」

朝のHRの後の空いた時間。友人の灰原灰がつまらなそうに人の机に肘をついて文句をたれた。朝休みに俺抜きでバスケットをやった件らしい。俺たちはいつも学校につくと朝休みに校庭のバスケットゴールでバスケットをする習慣があるのだ。

他の三人も俺の机の周りに集まってゲラゲラ漫画の話なんかをして笑っている。カイだけはしつこくそのことを訊いてきた。

「別に・・・俺がいなくても気にするなよ。」

素っ気なく答えるとカイは怪訝そうな目で俺を睨んだ。

「ねえ、あの子には近寄らない方がいいと思うよ。」

あの子・・・なんだこいつ知ってたのか・・・どうやらカイは今朝の少女とのドブネズミの件を知っているらしい。

「なんで？」

平然と聞き返すとカイはますます怪訝そうに眉間にしわを寄せてもはや少し怒ったような調子で言葉を返してきた。

「なんでってさあ。知らないの？」

「だからなにが？」

「木村青子だよ。マコトが今朝一緒にいた女子。」

「へえ、あの子、木村青子って言うのか・・・。」

そういえば名前は聞いてなかった。カイが知ってるって事はやっぱりルカ小の生徒なのかな。

「あの子、何年なんだ？」

「同学年だよ。てゅーかマコト。あの子にはもう近寄らない方がいいよ。」

またこれだ・・・。いったいこいつは何が言いたいんだ？でも少し、ちようどいい。こいつから彼女の情報を少し聞き出してみようか・・・。

「何で近寄らない方がいいんだ？」

「なんでって、マコトって本当に興味がないことは何も知らないんだよね。」

「うん、それで？」

皮肉な言葉を浴びせたつもりが平然と流されて、呆れてどうしようもないと顔に手を当てて嘆くカイは真顔で俺を見据えた。

「あのね。あの子けっこう有名なんだ。妙な噂がいくつもあるんだよ。」

「妙な噂？」

はて・・・聞いたことがない。ま、やっぱり俺はカイの言うとお
り無関心な人間なんだな。

「良くない噂だよ。これは。」

もったいぶった感じで言うカイ。俺は少し面倒くさく感じた。見
た目よりもせつかちな性格なのだ。

「なんだよ。早くいえって。」

「うん・・・実はあの子、何度か学校に親が呼び出されて怒られ
てるんだよ。」

「あ、それ俺も知ってるよ。指導室の中から親と一緒に出てくる
のを二組のヤツが見たんだよな。」

そこで隣にいた高橋という友人も話しに加わり。当然他の二人も
アオコの噂の話題に参加した。

「あれだよ。凶工の原田に怪我させたヤツだろ？」

「いや、やつぱすげえのは学校中の花壇に変な薬品蒔いて枯らし
たヤツだろ。」

みんなは口々に噂を掘り起こす。俺はいっぺんに言われては何が
何だか分からずカイに説明を要求した。するとカイは小さく頷いて
話し始めた。

「あのね、あの子、一組の生徒なんだけど。友達一人もいない
だって。いつも一人で窓の外を見てるんだ。」

この前、凶工の原田が指を怪我して休んだじゃん。アレ、あの子
が電気のこぎりにいたずらして電源のスイッチを狂わせたせいなん
だって。

それと前に一回、校長が大切にしている校庭の前の花壇の花が全部
枯れちゃったじゃん。あれも前日の理科の授業中に木村青子だけ一
人で塩素系の変な薬品作って、それで枯らしちゃったんだって言
われてるんだよ。」

「へえ。」

終始、怖い話でも語るように話したカイを見て、俺はなまじ信じ

ていいものなのか分からない話に冷めた相づちを返した。

正直、どれも噂に過ぎないじゃないか……。でも思い出されるのはドブネズミを眺める彼女の悦に満ちた表情。ネズミは死んでいた、彼女は笑っていた。

本当に……。興味をそえられる女の子だ。

「ねえ、マコト？もうあの子に近寄らない方がいいよ。分かるでしょ？あの子ちょっと変なんだよ。」

カイが念を押すようにそう言うときチャイムが鳴って一時間目の授業のため教師が一人教室に入ってきた。

みんなはだるそうな顔を浮かべそそくさと元の席に戻る。俺は一人、彼女のことを考え続けていた。

”タラリラット、タラリラ、タラリラ、タラリラ”

その日、学校が終わると俺はいったん家にランドセルを置くことなく友達の家へ向かった。カイの家だ。カイの父さんはバスケットボールがうまい。ここ数年は日課のようにカイの家に俺はバスケットボールを習いにいる。まあ、習慣だ……。今ではもうそれ以外にやることが見つけられないからそうしている感じだった。

そんなときだった、その曲が聞こえてきたのは。

初夏が始まり始めて、少しは日差しがジリジリと照りつける歩道。それでもこの日は例年に無く暑かった。季節を早合点して現れた多くのセミ達のうるさい羽音がどこからともなく耳を打つ。日差しが西の空からカンカンに照りつけ、俺は帽子を被って来れば良かったと後悔した。

白い日差しに白い高級住宅街。さまざまな家々の庭先の新緑の植物。どこかの家の犬の無き声。でも道には誰の気配もない。

俺は一人、もくもくといつもどおりの道を歩いた。でもふと思っただ。

今日ぐらいいは違う道を使おうかと・・・。

変化を求めていた。そんな俺にとっては遅いぐらいの決断。いつもならまっすぐカイの家につくはずの道を折れて、俺は大きな竹林が緩やかな傾斜にたたずむ、小道に入った。

今までこんな道があることを知らなかった。バカみたいだ。こんなに長くここらへんに暮らしていて、知らないことなんていっぱいあるものだというのに・・・。

俺は不思議とその不幸に幸福を感じた。知らない道。知らない風景。竹林の向かいに並ぶ住宅のどれもが新鮮で、竹林から流れてくる涼しい風が妙に心を穏やかにさせた。

その道をあたりを眺めながらゆっくり歩いている途中、どこからかピアノの演奏が流れてきた。

今も四方から耳を打つセミの鳴き声。それをBGMのように使っているかのようなリズムの曲。

”タラリラット、タラリラ、タラリラリラ、タラリラ”
聞こえてくる。

辺りを見回す。人影は無い。白い西日に照らされた住宅街がたたずみ、その正面にはうっそうと立ち並ぶ竹林が凜と存在する。

音楽が聞こえてくるのは・・・大きな白壁のお城のようなとがった屋根のついた屋敷からだった。

屋敷の前には黒い西洋風の鉄格子の門があり、左右の門柱には”木村”という名札がはめ込まれていた。

ここら辺には時々こんな風な奇妙な風体の大きな屋敷がいくつか存在する。また妙な穴場スポットを見つけってしまったと内心俺は喜んだ。

門前から正面に見える白い屋敷には二階部分の高さにふきだし窓があり、そこには半円形のテラスが設けられていた。

まさに西洋の貴族の屋敷といった姿で横たわるそのお屋敷。その正面のテラスの向こうのふきだし窓が開かれ、そこからそのピアノの演奏は流れ出していたようだった。

窓は白いレースのカーテンがちらりと風にたなびくのが見えるくらいで他はテラスが邪魔してよく見えない。

”タラリラット、タラリラ、タラリラリラ、タラリラ”

俺は音楽に神経を麻痺させられるような、不思議な感覚を覚えた。妙に涼しい。セミの泣き声がまるで風鈴の音のように聞こえてしまう。周囲のかすかな物音をすべて演奏の一部のようにして、ピアノが主旋律をかなで続ける。

繰り返される音調。その中にはひとかけらの安心と、どこか物悲しい束縛感を感じた。

誰かが呼んでいる……。どうして自分がそう思ったのか定かではない。

俺は知らず、その屋敷の門扉へと歩を進めた。

そんな刹那……。演奏が途切れた。

突然だ。まるで永遠永劫持続し続けるような曲調が突然予期せずシャツトダウンを向かえ……。俺が我に帰ったように、ぽつねんと白い洋館を見上げていると……。少女が一人、テラスから顔を出した……。

向かいの日差しを眩しそうに手でさえぎった後、少女が見下ろした目線の先には、俺の姿があった。

目と目が合う。

黒い瞳が、白い顔と対比してまるで人形のように端正な顔立ち……。少女は微笑む。

そして小さく手招きをした……。

彼女に招かれた。白い洋館の中。広々とした玄関先の広間は天井が体育館のように高く吹き抜けになっていて上に大きなシャンデリアが吊り下げられて明かりを放っていた。内装も西洋の貴族の屋敷のイメージそのもので、広間の両側に階段があり、吹き抜け二階部

分の廊下からひとつの扉を開けて俺が招かれたのはフローリングの床がのびのびと広がる一室だった。

テラスに出る窓があり、その窓の左側、部屋の左端には一台のグランドピアノがあった。その部屋の中はまったくそれ以外に何かが置かれていることは無く殺風景なものだった。白い壁に覆われた四角い部屋。フローリングの床が広がっているここはまるでダンス教室のようだ。彼女がバレエでも踊っているような姿をいやでも連想してしまう……。

「あなた、名前は？」

彼女はそれまで一言も口を開かず俺をここまで案内してきたが、部屋に入り初めてそう訊いて来た。

「お、俺？」

思わず自分を指差して聞き返してしまう。すると彼女はクスリと微笑み

「あなた以外、誰が居るのかしら？」

と言ってピアノのほうへ向かった。

「マコト……。」

俺は彼女のあとをついていきながら答えた。正直、自己紹介とかあまり慣れていないからあまりちゃんとした答え方になっていたとは自分でも思っていない。

「そう、いい名前ね。わたしはダーク。」

言って彼女はピアノいすに腰掛ける。青いドレスのようなワンピースを着た黒髪の長い彼女がグランドピアノに向かい合うとこれ以上が無いくらい絵になる。俺はこの屋敷に招かれてからずっと彼女のしぐさや姿の一つ一つに見とれていた。

彼女、ダークはおもむろに鍵盤をはじき始める。

”タラリラット、タラリラ、タラリラリラ、タラリラ”

あの曲だ……。

脳に響き渡る。繰り返される旋律。とまらない律動。不思議な調和。流れる水のように自然に耳を通して脳に送られる。それはまる

でサーカスのピエロの踊りのようで、それなのにまるでその演技を牢獄から眺める囚人のようでもある。途方も無い矛盾の塊のような音色だった。

「綺麗な曲だね。」

ありきたりな感想。それを聞いて彼女はにっこりと微笑んだ。

「そう？この曲、わたしが作ったのよ。」

「へえ、自分で曲を作るんだ。」

「普通よ。モーツアルトなんて6歳で作曲を始めたのよ。」

別段得意気でもない。本当になんのことはないという風に行ってダークは微笑を浮かべながら身体を俺の方へ向けた。

「ねえ、今朝のネズミ、実は妊娠してたみたいなのよ。」

・・・正直、どう返事していいか分からない。今朝のネズミってあのドブネズミのことだろうか？それが妊娠？

「あの後、キミが行っちゃってから、わたし少しネズミのお腹が気になって破裂してた腹部を探ってみたのよ。そしたら、すごい。ピンク色のビー玉サイズの可愛い子達が十五匹もまったのよ。」

彼女はまるで近所の家のペットの赤ん坊を見てきた話をするかのように嬉しそうに語った。

俺は正反対。さすがにピンク色の十五匹とか聞くと胸くそ悪くなる。正直、なにが面白いのか分からない・・・。

それでも、ダークの笑顔は本当に綺麗だった。

「普通、妊娠中は雌は狩りはしないと思うから、何かの理由で移動している途中の事故だったのかな・・・。」

何か言葉を見つけようと思ってそう言うたすぐにしまったと思った。そして予想通り彼女は小首をかしげる。

「いいじゃない、そんなこと。大事なのは過去じゃなくて未来でしょ？生きているモノはいつかは終わる。終わったらそれはただのゴミ。でもその終わる瞬間の形はすごく綺麗なものよね。」

うつとりと彼女は虚空を見つめて何かを思い出しながら笑った。まるで昨日のごちそうを思い出すような表情だ。

まったく理解しがたい……。なのに、こんなにも興味をそそられる。ダークは美少女だった。

「ねえ……」

思い切って訪ねてみることにした。彼女はふと気がついたように振り向き「ん？」と静かに俺を見据える。

「噂なんだけど……いや、もちろん、俺は信じてないんだよ。」
自分を押し出すように拳を握りしめた。彼女はキョトンと俺を見つめる。

「図工の原田が怪我したのってキミがやったの？あ……花壇の花を枯らしたのもキミだって噂だよ。」

確かめてみたかった。そういう噂があるなら本人に聞けば一番早い……。

「マコト君はその噂、どう思うの？」

ダークは心なしに覗くように俺を上目に見た。

「俺は……もちろん信じてないよ。」

「違うわ。その噂は本当よ。それでもマコト君はわたしのことを嫌いにはならない？」

彼女の瞳は黒く、俺を捉えて離さない……。吸い込まれてしまいそうな色だ。

「嫌いになんて……なるわけないよ。」

彼女の美貌に見とれながら答えるとダークは「よかった。」とにっこり可愛く笑った。

「でも、どうして？」

「ん？何故そんなことをしたのかってこと？」

「うん。」

「じゃあ、逆に聞くけど、花を枯らしたらいけないの？誰が決めたの？それに図工の原田はわたしの身体に気安く触れたの。報いを受けてもらっただけよ。」

わたしは悪くない。そう付け足して彼女は再びにっこりと微笑んだ。本当によく笑うダークだが、どうしてだろう？俺は彼女の本当

の笑顔を見てみたいと思った。

「マコト君は・・・モノが終わる瞬間をどう思う？」

「モノが終わる？」

聞き返す俺。彼女は小さく頷く。不思議な表現だ・・・。モノが終わる瞬間。それに意味なんてあるのか俺は今までに考えたこともなかった。

「0の概念って言うのかしら・・・。人間はそれを知っているわ。」

「0の・・・概念？」

「そう、0の概念。」

彼女は反復して答えて徐に立ち上がると広々としたガランドウの部屋の中の真ん中に立った。黒い瞳で俺を見つめる。

「たとえばこの部屋。0はいくつあると思う？」

俺は唐突に訊かれて戸惑った。しかし、一秒たつても五秒たつても十秒たつても答えは思い浮かばない。0がいくつってその問題自体がなんて不可解なんだろうと気がついたのは数十秒が過ぎてからだった。

しばらくして彼女が微笑むのを合図に俺は考えるのを止めた。

「ふふ・・・答えは難しいわね。0の数を数えたら0だわ。でも0を一個の関数と考えて数を数えたとおそらく結果は無限大数。これがどういうことだか分かる？」

「いや・・・どういう意味かな？」

「とつても簡単な事よ。0とはつまり、始まりから終わりまで存在する不在数なのよ。」

存在する不在・・・。不可解だった。チンプンカンプンな理論を耳にして俺は正直数学は得意ではないとしか思えなかった。

彼女はその日、最後にこういった。

「0になる瞬間が素敵。だってそれまで持続されていたモノがその瞬間を通過すれば次の瞬間にはゴミになっているんだから・・・。不思議だと思わない？」

俺がこうして彼女と付き合い出したのはひとえに好奇心からだっ
た。

/ 2

昼休み、友達はみんな校庭でバスケットでもしているのだろうそんな
時間。俺は一人、給食が終わるとそのままその場所に向かった。
四階建ての校舎の五階に向かう階段。そこはルカ小の屋上に繋が
っていた。

丘陵の断崖部分に建てられた小学校。その真上から見渡す風景は
絶景で、遠くパノラマのような家々、町、その向こうの雲に隠れた
山々が眺められた。それは、フェンスに囲まれた空の上の高台。ま
るでそういう眺めだった。

あの日、彼女と出会ってから俺は毎日、昼休みにここへ来る。そ
していつも彼女は俺を待っていた。

貯水タンクの木陰で俺たちは並んで座った。屋上の緑色のゴム製の
地面は砂埃などで汚れていたけど、俺たちは気にしないで腰を下
ろしていた。屋上は下よりもずっと風が強い。夏が深まってきたこ
のころ、ここは吹き抜ける涼しい風で気持ちよかった。時々、強
い風が吹くと彼女の美しい艶髪がたなびくのを、俺は密かに楽しみ
にしていた。彼女は髪が風にさらわれるたびにどこか風とじゃれつ
くように楽しそうな微笑みを浮かべて髪を手で押さえる。その仕草
を、まったく飽きないくらい俺は美しいと感じた。

俺と彼女は毎日のようにこの時間になるとこの場所で会話をした。
どうでもいいことが多かった。ほとんどは自分たちの暮らしとは
直接には関係のないような話題。俺はよくスポーツ選手のうんちく
なんかを話したけど、彼女は好んで終わりの話をした。

それは広義なことだった。紀元前にあったフェニキアとかローマ
とかカルタゴとかの文明や国家の衰退に始まり、つい最近何らかの

事件で落命した一人の人間の死。潰えた宗教から嫌われた思想。では人間よりも遙か前に絶滅した生物のこと。全てはその経緯や滅んだ後のことは語らなかつた。ただ、その滅びた状況だけを・・・終わりのだけを俺に事細かに語った。

ある時は、死をとって十字架に貼り付けにされた革命家の最後。ある時は大いなる繁栄と栄光に彩られた帝国の錆びるような緩やかな衰退。またある時は、齢七十を越えて長年連れ添ってきた最愛の妻に殺された男の最後。そして一人牢獄の中で詩に自らを遣し刑を執行された囚人の最後。それに二億数千年も前に地球上の全ての生物たちを襲ったと言う空前絶後の未曾有の地球内地下マグマの大活動、その下敷きにされて終わりを迎えた数多の生物たちの最後。

彼女はよくこう言った。

「現代はいいわ。平和平和と言うけれど、この地球の五十数億年の歴史の中で、もつとも種の絶滅が急激に進んでるんだから。巨大隕石よりも、マグマの活発な活動よりも、怖く恐ろしいウイルスよりも・・・多くの終わりを感じさせることができる。人間ってやっぱりすごいわ。」

終わりの話。その最後にはいつも彼女はこう付け加える。

「わたしはね・・・人間は、終わりを司ってるんだと思うの。全てを終わらせるその瞬間に立ち会えるのはきつとわたし達人間だけよ。」

そう言つて確信した微笑みを浮かべる彼女に俺はいつも見とれるばかりで深く考えることはなかつた。ただ、彼女の発想は終末思想とも言えない。その着眼点が終わりを望むのでもなく信じるのでもなく、終わりのその瞬間に美意識にも似た恣意的な何か、嗜好のようなものを持っていると言うことだけは押しつけられるようにまざまざと感じていた。

つまり彼女は、三度の飯よりも終わりを見るのが好きなのだけなのだ、と俺はそう解釈していた。

でも、その時俺はまだ、彼女の中の使命感にも似た、その狂い落

ちそんな欲求というもののまでを、見いだすには至らなかった。

「ねえ、マコトお」

その日、朝からカイはしつこかった。そろそろ九時のチャイムが鳴って先生が入ってくる。

「もう席に戻れよ。」

素っ気なくそれだけ言って俺はカイの言葉に耳を傾けようとはしない。カイはますます不満そうにふくれっ面を浮かべた。

「もうっ。マジなんだよ？マコト。あの子はやめときなつて。」

「うるさいなあ・・・俺のかつてだろう？」

ほっとけよつとそっぽを向く。俺は三階の窓から遠く丘の下に広がる町並みにつまらない視線を落とした。

隣では未だにグチャグチャと口うるさい友人のお小言がてんこもり・・・やってらんねえ。

外の景色。そろそろ真夏といってもおかしくないカンカン照りのコンクリートの町。ミニチュアのようなバイパスやビルが遠くに見えた。もうすぐ夏休み・・・そうだ。今年は去年とは違う夏休みになる。

「今日もさ、今朝あの子を見たけど、なんか捨て猫にエサをあげながら不気味に笑ってるんだ。気持ち悪いよあの子の目・・・闇みたいに黒いんだもん・・・。」

カイが言う言葉、その言葉の節々に入る彼女への暴言。それが俺の思考を加速させた。人のことで怒るのは俺にしては珍しい。

「気持ち悪い？」

気づくと聞き返していた。かんに障った。

カイはどことなく様子を察したように後ろめたい顔をして小さく頷く。俺はまた外の景色を眺めながら

「俺・・・今度の夏のキャンプはパスするわ。他にやりたいこと

があるんだ……。」

告げた。以前から言おうと思っていただけ、言い出せなかったことだ。

毎年、決まって夏休みになるとカイの親父と俺とカイと他の友達を誘って山の方へキャンプに行く。ここ三年は続いていた習慣だった……。

カイは、きつとショックを浮かべた顔をしているだろう……。暗く沈んでうつむいていることだろう。だから俺はカイを振り向いたりしなかった。ずっと外の風景を眺めていた。

隣に感じるカイの暗く沈んだ雰囲気がいじりじりと伝わってきた。俺は心を堅く縛って窓の外を眺め続けた。彼が言った彼女への暴言、それが手助けして俺はカイを振り向かない……。でもしだいに、なんの返事も返ってこないその友人が気になり、そつと横目に隣を見ると、いたはずのカイはもうそこにはいない……。

教室の中彼を捜すとすぐに見つかった。自分の席に戻っていたのだ。

カイは誰かと話している。少し楽しそうだった……。そして俺は、少しつまらない気持ちになった……。

何かが離れていく感じ……。

これでいいんだ。そう思った。

その日の昼休みも、給食のパンとスープとサラダを平らげると残った牛乳をスープの運ばれてきた鍋に流し入れて瓶を空にして鉄かごの中に戻した。俺は足早に屋上へ向かった。

教室を出る際にいつものようにカイに呼び止められることはなかった。いつになくスムーズに屋上へ上がると、すぐに彼女を発見した。

所定の位置。給水タンクの木陰にダークは座って分厚い本を膝の

上に開いて読んでいた。

「やつほう。」

声をかけると彼女はふと気がついて俺ににこりと笑いかけて本を閉じた。

「なに呼んでたの？また難しい本？」

「うん。」

彼女は頷いて膝の上に本を立てる。題名は

「存在と時間？」

「ええ、とても興味深い内容よ。」

につこりと答える彼女の笑顔はいつも通り美しかった。整った作法に整った顔立ち、持論を持った秀逸な頭脳。いったいこの子のどこがそんなに危険だと思うんだろう？俺は意味のわからない友人の忠告を思い出して考えすぎだと振り払った。

しばらく二人並んで座って水たまりを見ていた。昨日の昼から夜にかけて続いた長雨が屋上の入り口の壁の溝のところに少しまだ雨水を残していたのだ。

「人間はすごいわね。」

ずっとわき上がるような思いをダークが口にした。そのまっげの長い黒い眼差しはまっすぐに水たまりの方を見据えたままだ。

「いろんなものを終わらせてしまえる。戦争、大気汚染、科学的な解明。」

多くの生物の命を奪うことができ、多くの未知の存在を解き明かしてしまえて、お互いに破滅的な争いを楽しむことができる。

これってすごいことだと思わない？」

彼女はふと横目に俺を一別する。聞かれて俺は

「たしかに・・・すごいかもしれないね。」

とそれだけしか答えられる脳みそを持っていなかった。ダークの考えは深すぎて俺には少し途方もなさすぎてわかりかねる。正直な感想はそれだった。でも彼女に侮蔑されたくないし、嫌われたくない。話を合わせるのは当然だった。

「わたしはね。一つまた一つ、歴史を生命を理論を、終わらせていく人間が好きよ。だからわたしもそう在りたいと思ってる。きつと純然なのね・・・わたしは。」

一瞬、彼女はもの悲しそうに視線を落とした。何かあったんだろうか？訊いてみようか迷った。でも訊いていい物なのか、分からない。彼女は何一つ自分自身のことを俺に語ってくれたことがなかったのだ。もちろん、俺も自分のことを彼女に話したことはない・・・だから彼女の感情を深く読もうとしても読めるものではなかった。どこか寂しく感じた。一緒にいるのに、一緒にいないみたいな感覚があった。そしてそれを彼女も感じてるなんて・・・このときの俺は知らなかった。

「マコトくんは、今までにどんなことを終わらせてきた？」

唐突にダークはそんな聞いたこともないような質問をしてきた。俺は戸惑った。考えてみれば、俺は彼女の言うことなす事全てに戸惑っている気がする。俺の小さな存在じゃ把握しきれない。そんな彼女が好きだから、戸惑いも喜びであれた。

「終わらせたかぁ・・・。」

ろくに考えもしていないのに、考えている風に俺はそう口にした。

「さつき、給食を終わらせてきたよ。」

とつさに冗談交じりの言葉を吐いてみた。つまらない冗談だ。言った後、しまったと後悔した。でも彼女はことのほか面白かったらしくクスクスと口元を拳で押さえて笑った。

「そうね。食欲を満たすのも、りっぱな終わらし方よね。」

納得するように数回頷いて、彼女は

「でもね。」

と切り返した。

「わたしが望む人間のあり方は、それこそ食事を終わらす程度のそこら辺の動物でもできることじゃないわ。」

嫌みともとれるその言葉。動物扱いをされたにもかかわらず俺は別段なんの反感も抱かなかった。むしろ、納得したし、彼女の言葉

の続きを期待した。

そうだ。最近では彼女のこの意味の分からない話を俺は楽しんでいた。飽きない・飽きさせない。ダークにはそういった魅力もあった。

「人間的な強引さ。終わらせるところか奪うと言っても過言ではないもの。それがわたしが求めている人間の在り方。」

分かるかしら？ふいに振り向いてダークは俺を見据えた。

「奪う・・・？」

「そう、奪い取るの。そして奪われたものは終わる。これが摂理。生物の食物連鎖で言うところのピラミッドの頂点に立つのが人間。人間には奪い取り終わらす権利があるの。それはもう、義務といつても間違いないわ。」

彼女は黒い瞳をにやりと微笑ませ、美酒に酔うように言った。

その言葉の意味をどう解釈すればいいのか、やはり俺には分からない。でも少なくとも、彼女は何かを執拗に求めていた・・・。

「そうだね。マコトくん。今日はいいものが手に入ったの。少し体験してみない？」

「？」

いいものが手に入った・・・その誘いに俺は最初何が何だか分からないまま、小首をかしげて、次に首を縦に振った。

「じゃあ、今日の放課後。一組の教室で待つてゐるわね。」

放課後、教室掃除が終わらすると、昼に屋上で言われた言葉を思い浮かべていた。その時のダークの強かな微笑みを脳裏に浮かべて。俺は下校気分一色の廊下を一組へ向かって一人歩いていた。教室を出るとき、カイと目があつた。でも彼が先にそっぽを向いて、俺は冷やかな気持ちでそれを流した。

廊下に行く。俺が向かう一組は三階校舎の右端、階段の前をすぎると俺は人の流れとは逆に進んでいた。

教室に着くとソコはもう人がまばら。掃除も終わったらしく掃除当番が数人、入り口の前でゴミ出しにいくものを決めるじゃんけんで白熱していた。

その彼らの向こう、教室の一番後ろの席の窓際にただ一人彼女はひっそりと座っていた。三階からの窓の外の景色を眺め、彼女もパノラマの町を眺めているのだろうか……。

考えてみれば、彼女とこうしてこのクラスで会うのは初めてだ。彼女との話で学校でのことを聞いたりクラスの話を話したこともない。だからこうして彼女が自分の席に座っているのを見るのはコレが初めてだったことに気付いた。

呼ばなくてもダアクは入り口の前に立つ俺に気付いてこっちを見て美しい微笑みを浮かべた。

俺は徐に教室に足を踏み入れる。掃除当番達の白熱したじゃんけんバトルが終止符を打つ誰かの感嘆の叫びが聞こえ、ガヤガヤと彼らの立ち去っていく音が遠のいていくと、教室は静謐に静まりかえった。

遠く、開けっ放しの窓からサッカーをする少年達の叫び声が聞こえるくらいで、ますます教室はシンと物音一つ発さなかった。開け放された窓に閉ざされたカーテンが一部吸い込まれ縁に張り付くように外にもつていかれる、そしてまた風がやむと今度は膨らむようにこちらへたなびく……まるで漣のように自然なリズムだった。

誰かが廊下を駆け抜けていった。大声で何かを呼び止めながら……それが合図だった。

彼女は立ち上がった。

「早かったね、マコトくん。」

強かな微笑み。見ようによつては何かを企んでいる表情。でも、彼女の容姿はどんな表情を浮かべても見とれるほど美しいモノであるのに違いはなかった。

「待たせるわけにも行かないからさ。急いで終わらしてきたんだ。」

「そう、ありがとう。」

この時、彼女は少し機嫌が良さそうだった。いや、いつも空中で静止した紙風船のように浮いた感じで別段感情に上下は無い子だけど、どこことなく気分が良さそうだったのが俺には直感的に分かった。

「今日はいいものが手に入ったわ。」

喜びの声を上げて彼女は赤いランドセルの中から一つの毛むくじやらの何かを取り出した。最初俺はそれが毛糸玉か何かのように思えたが、すぐに見解は変わった。

「子猫？」

訪ねるように呟くとダークが

「うん、まだ生きてるわ。」

と答えて微笑んだ。

子猫は薄い茶色い毛で手のひらサイズのまだ生後数週間くらいではないかと思わせる小さなものだった。

「なんか・・・弱ってないか？」

どこか動きが鈍く、鳴き声もほとんど発さない。小さい瞳はほとんど閉ざされて首に力が入っていない。ダークの手の上でほとんど死んだように倒れている子猫を見て俺は不安になった。

「弱ってるわよ。今朝からずっとこの中に入ってたんだから当然だわ。」

しれっとそんなことを言うダークは笑っていた。半死状態の子猫を見て悦に浸った美しい貌をしていた。

嘘だろ？

刹那的な理解が俺を襲った。半死の子猫。微笑む彼女。コレが何を意味しているのか、最近彼女と付き合っていてようやく俺はその

思考回路の行き着く先に目がいくようになっていた。

「その子猫を・・・？」

「終わらせるわ。」

薔薇のように赤い唇がそつとそんな酷い言葉を・・・。

冗談じゃない・・・。

きつと何かの間違いだ。そんな小さな命を・・・。全身を嫌悪感が覆った。さすがの俺もコレばかりは拒否反応があった。俺は子猫を興味本位で殺せるほど無邪気でもなければひねくれてもいない・・・。

美しく無邪気な彼女の美貌と机の上の一匹の貧弱な子猫。なんともいえない切なさか胸をかきむしった。

「や・・・やめた方がいいよ。」

気付いたらそう言っていた。

「なにを？」

彼女はゆつくりとどこに隠し持っていたのか果物ナイフを片手に光らせる。そしてまるでまな板の上に食材を置くように子猫を机の上に置く。

「やめるって？」

今更何を言い出すの？つと不可解そうに小首をかしげる。彼女の瞳はおぞましいほど黒色に浸食されていた。それはまるで濃厚なブラックチョコレートが眼球に封じられ今にも溶け出しそうな・・・そんな瞳だった。

「いい？マコトくん。あなたがたつて虫を殺したことがない訳じゃないでしょう？」

突然の質問だった。終止疑問系のようにも聞こえる。誰もがイエスとしか答えようがない。故意でなくとも、人間が生きて歩き回る以上、虫の一匹や二匹踏みつぶしてはいないと言い切れない。ましてや貌に止まろうと身体の周囲をブンブンと旋回する蚊程度なら数匹は殺したことがあるだろう。

返事をしないとダークはその質問はイエスということととつたら

しい。

「そのあなたが殺したことがある虫もここにいる子猫も同じ命よ。そしてその命は定義上、必ず終わりが来るモノ。そしてソレを終わらす権利がわたし達人間にはあるのよ。それを分かって欲しいの。」

「で、でも虫と猫とじゃ違いすぎるよ。猫は毛があつて大っきくて・・・とにかく形がリアルだ・・・。」

嘆くように言つて、そして俺はあのゴミ箱の中のドブネズミを思い出した。あの時もそうだ。犬や猫やネズミをそんな虫を殺すみたいに簡単に殺すなんて俺にはできない。

「あなたは思つていたよりも意気地なしね・・・。」

彼女はため息混じりに残念そうな貌を浮かべた。それはどこなく寂しそうな貌だった。

「じゃあ、今日は帰りなさい。きっとそのうち、終わりを感ずる喜びを分かち合えると信じているわ・・・。」

信じているわ・・・。

いつの間にか雨が降り出してきた。走つた走つた走つた。全力疾走で俺は家に帰った。何かに追われているような感じだった。どこか後ろめたい気持ちと、汗と、雨と、涙が入り交じった。貌を袖で拭った。

鈍色の空が夕日を隠して、家までの道を俺を一人きりで走らせた。家に着いた。玄関を開けて母さんに呼び止められてもなお俺は走った。二階の自分の部屋に飛び込み、そして引きこもる・・・。

ベッドの中に潜り込み、ふとんで頭を押さえ耳を塞ぎ視界をシャットダウンした。何もかも遮つてしまいたかった。あの子猫は今頃どうなつてしまっているんだろう・・・？

考えるだけでおぞましさをもちました……。

雨音がふさがれた鼓膜にかすかに聞こえる。彼女の言った言葉を思い出した。

信じている……。

身震いがする。俺は彼女を好いている、でも同時に恐れている。

俺はきつと触れてはいけないモノに触れてしまったのかもしれない……。

ドクドクと脈打つ鼓動のように雨音がさんざめく……。

そんな中脳裏に浮かび上がるのは彼女の美しい貌……。そして博識な知識。なによりもどこことなく寂しげな表情。

俺を信じている？俺を待っている？彼女はいたい……。俺に何を求めているんだ？

ふとカイの貌が思い浮かんだ。俺が無碍にした友情……。彼は「僕の忠告を守ればよかったのに……。」という貌を浮かべてすつと消えていく……。

俺は荒野に立っていた。誰かが土を掘り起こして……。中から何かを引きづり出して食べている。

人だ……。人の死骸を食べている。よく見たらここは荒野の真ん中にある墓地。誰も近寄らない場所……。人の死骸を喰っている彼女は誰？

その長い黒艶の見覚えのある美しい髪……。

彼女は誰？

息をのみこむ音が鼓膜に響く。心臓が高鳴り、そつとのぞき込むとはき出したくなるような悪寒が背筋を襲った。

「タスケテ……マコト……。」

カイだった……。

顔の半分以上の肉が剥がされ、足からかぶりつかれている彼が必死で身を起こして俺を見つめる……。右目が皮が破かれ筋肉の筋と骨だけがむき出しの右目が……。俺に助けをこう。

そして彼女は気付いた。徐に振り返るとその顔は……。

ツツツ!!!

目が覚めて跳ね起きると朝になっていた。窓の外から雀の鳴き声が聞こえる。布団にくるまっていた自分。それと静かな朝の自室。なんて恐ろしい夢を見たんだろう……。体中汗ばんで気持ちが悪かった。

今日、学校に行かなきゃダメかな？ふとそんな憂鬱な思考が巡った。

昨日のことを考えると本当は行きたくないくらい、俺は少し怖い。だけど習慣。憂鬱に思いながらも俺は服を着替えて朝食を摂り、友達が列をなして迎えに来ると、母さんにせかされてそそくさと家を出た。

住宅街、二車線道路、踏切……。道道の途中で俺は辺りを見回した。知らず彼女の姿を探した。

会いたいような怖いようなそんなこんががった気持ちがしていた。

彼女は俺にガツカリしていた。それでもまだ見放したという感じではなかった。でも俺はもうかなり彼女にびびってしまっている。

ダークは……。どこか

寂しそうだっとな。

ポツリ、切ない感が胸をよぎった。

学校に着くと、三階に上がってすぐ横の1組の方の廊下に入だかりができていた。

ダークの教室だ……。

俺は両隣の友人達が興味本位の視線と言葉を発す中、足早にその群衆に迫った。

人だかりは六年一組の教室の入り口を塞ぐようにして扇形に広がっている。俺が人混みをかき分けようと押し入ったとき、人だかりの動きが変わった。

前の方から後退していき、入り口に向かって一本の道を開いた。

教師の一人が、片手にビニール袋を持ってそそくさと出てきて去っていった。教師の持っていたビニール袋は手のひらサイズの黒い固まりを包んでいた。

人だかりはそこで解散。しかし、その日の朝はその話題でどのクラスも持ちきりだった。

一組のゴミ箱に子猫の死体が捨てられていたらしい。それも切り刻まれて腸を引きずり出された状態で無残に死んでいたとか……。

学校側はあまりにも騒動が人伝に伝わりすぎたため、朝のHRで担任がこの事件について語り、一時間目は変質者を見てないかと、動物や命を大切にしようという道徳の授業に切り替えられた。

二時間目には校長の臨時集会が体育館で盛大に執り行われ、生徒達はみんな計四十五分を立ったまま眠る時間として終わらした。

この日、木村青子という少女は学校を休んだ。次の日も、その次の日も……結局、一学期が終業するまで一組の彼女の席は空席のままだった。

終業式だけは楽しみにしていたはずだったのに……。

俺の彼女に対する恐怖は日に日に薄れていった。夏休みが来て、しばらくするとおぞましい彼女の行動はどこかに忘れ去られ、切なさだけが小さな水たまりのようにはかなく残った。

彼女が時々見せた寂しそうな笑顔。寂しそうなまん丸い黒い瞳。まるで三日月の下、うつそうと広がる静謐な森林の中で孤独に遠吠えを上げる狼のような彼女……。

もう一度会いたい……。会って彼女を助けたい。

彼女と会わない日々が続き、俺の心の中に芽生えたそれは、恋愛感情にも似た同情だったのかもしれない。

俺はある晴れの日、金城の住宅街の一角、竹林の傾斜の小道の先にある彼女の邸宅へ行った。彼女に会いたかった。

でも邸宅はひっそりと音もなく佇み。向かいのテラスにある窓も固く閉ざされ、家には誰の気配もない。勇気を出してチャイムを鳴らしてもやはり、なんの応答も帰ってくることはなかった。

突然現れ・・・そしてあんな形で俺の前から消えてしまったダーク・・・。

心が沈んだ・・・もうこのまま彼女が一生手の届かない場所へ行ってしまうような気がして、めいっただ。小学校二年の時に仲の良かった友達の一人が転校したとき、以来の激しい痛みだ・・・でも、俺はどこかで信じていた。彼女が再び俺の前に現れることを・・・何故なら、

信じてるわ。

確かに彼女はそう言ったのだ。いつかきつと俺が自分と気持ちが一致してくれると信じると・・・それはいわば俺を待つという意味だと思う。

それなら彼女はきつと・・・再び俺の前に現れるはずだ・・・でも怖いんだ。次現れたとき・・・俺が彼女をまた拒絶したら・・・彼女はどんな貌をするんだろう・・・そう思うと怖くなる。傷つけたくない。壊したくない女性を、俺は傷つけるしかできないのだろうか・・・。

夏休みも中盤に差し掛かったある日のことだった。

その手紙が俺の家のポストに投函されたのは。
手紙は四角い小さな封筒に入れられたモノ。母さんから「あなた宛よ」と手渡されて開くと、一文が目飛び込んだ。

” 会いたい。夕方の五時半、あの教室で待ってます。

ダーク”

言葉もいらない。俺はその日、日が沈むより少し前に、その場所へ向かった。

学校は夏休み。地元の野球チームの少年達が校庭を広々と使ってAチームBチームに分かれた二面で練習している。

夕方。俺は今にも眠りにつこうという校舎に入った。中には人気がない。廊下の電気はほとんど消灯されている。明かりが付いているのは職員室と音楽室と2、3個の教室だけで後は死んだように静まりかえって薄暗い。

3階の六年生と五年生の階につく。1組の教室からも明かりは漏れてきてはなかった。でもそこに彼女がいることは何故だろう？俺には直感的に分かった。

徐に開け放たれた入り口の引き戸。中をのぞくと幻想的な風景が横たわっていた。

暗い一室。朱に染まる窓際。たなびくカーテン。開け放たれた並列に並ぶ窓。一番後ろの端の席に少女は寄りかかって待っていた。静かな・・・まるで洞窟の中のような寂しげな教室。焼けるような空を背景に少女の影は真っ直ぐに細長く伸びる。

額縁の中の世界に俺は足を踏み入れた。

少女の顔がよく見えない……。背景の燃える夕日があまりにも

強くて、少女の貌を陰らす。

「ダアク……。」

そつと声をかける。少女は頷く代わりに一步前へ出た。露わになる貌。あいかわらずの美貌。血塗りの唇。透き通る白桃の肌。黒真珠の艶髪。そして、一匹狼の黒眼。

「マコトくん……来てくれて嬉しいわ。」

背景音にささやかな野球少年達の熱のこもった叫び。比べて彼女の一言一言はまるで闇夜の遠吠え。月は見えない。

茜の日を背に彼女は微笑みながらもその裏では独りの狼の姿で机の上に腰掛け話した。

「マコトくん、ねえ、マコトくん。分かって欲しいの。あなただけには分かって欲しいの。このわたしの狂い落ちそうなほどの衝動を、この躍動を。」

ある種、偏執病にかかった人のような捉えて離さない目線。ガン見とでも言うのだろうか、恐ろしいほどの思いのたがが外れたような彼女の言葉……。しかし、何故？ダアクは笑っている。そう彼女はどんな感情の上でもいつもこうして笑っている……。

きつとソレしか知らないんだ……。

あまり考えずにも直感的に解釈が成ることがある。まさにこういう時だ……。

「みんなはそうでしょ？みんなはそうじゃない？」

死んだらダメ。殺してはダメ。生きていることが素敵。生まれることは美しい……。

でもわたしは違うのよ。わたしは違うんだから……。」

繰り返す一つの言葉を連呼する。まるで誰かに言い聞かせるように？俺か？それとも自分自身か？捕らわれている……直感的な解釈だ。

「わたしは滅びの中に生き残る。滅びの中をさまよい歩く。そして滅びの全てを看取る。」

人は死んだらどこへゆくのか？天国？地獄？

違う違う違う違うチガウチガウチガウチガウチガウチガウチ
ガウ・・・チガウンダヨ！」

猛烈に何かが爆発した。彼女は微笑みながらすさまじい憤りを言葉にして俺にぶつける。

「終わったらみんな0に戻るのよ・・・。0はゴミなの・・・終わったらみんなかたづけなきゃいけないのよ・・・。」

分かるかしら？と俺は聞かれて、その異常すぎる彼女を直視して言葉も出なかった。

「いい？マコトくん。」

彼女は立ち上がる。声が震えている。少し白熱しすぎたようだ。乱れた髪を整えながら小さくため息のような深呼吸をした。

「存在が時間を産む。これはつまり存在がなければ、わたしたちが生きているこの現実が存在しないということなのよ。でも逆に時間がなければ存在は独り・・・定義を与えられることはないわ。だから、存在と時間は相互依存した形で成り立っている・・・。いわば、同一の存在なのよ。」

ならば生は死を産む。これだって同じモノなのじゃない・・・。

女の人は子供を出産するけど、それは殺してることなのにがどう違うって言うの？逆に殺すことが産むこととどう違うって言うの？」

わたしには分からない・・・。そう呟いて彼女は視線を落とす。

俺の貌から初めて目線をそらした。やはりどこか寂しそうな横顔・・・。それでも俺は彼女の言葉に、返してはならないと思っていた言葉を返してしまった。それは衝動的だった。

「でも・・・殺すのはやっぱり違うと思う。ほら、キミが前に言っていただろう？今まで生きて動いてたモノが、次の瞬間には止まってしまう・・・。それって悲しい事じゃないかな？空しい事じゃないかな・・・。」

その瞬間に脳裏に浮かんだモノはネズミの死体、子猫の死体・・・。それだけだった。それだけのために、俺は彼女を再び否定してしまった。

一瞬だった。

ほんの一瞬のうちに彼女の黒い瞳に沸き上がる悲しみ・・・頬をつたう何か。震える唇。

切なかった・・・まるで初恋をした少女の可憐な心を拒絶したような罪悪感。これは・・・あまりにも残酷。

ダークは初めて表情を無くした。いや、初めて本当の表情を見せた。

彼女は笑わない。

黒色の瞳がただターゲットとそうでないモノを見分けるためだけのあの獣の感情の排他されたモノへ変わった。感情は皆無。とても美しい活人形のように白々として平坦な表情を浮かべている。

教室は平常心だったならば笑い出したくなるほどの静謐。窓辺からの夕日もだんだん浅くなり沈んでいく。明度はどんどん暗くなり・・・校庭で騒がしかった野球少年達の声も聞こえなくなってきた。

全ての音が遠く消えていった。

あとには二人だけが残った。

「きつと・・・」

彼女は小さく呟いた。

「違ったのね・・・ずっとずっと遠いところにいたのね。」

次の瞬間、ダークはユラリと何かを取りだした。滑らかなその切っ先の先端、鈍い光を眼前で捉えた。

それは短い果物ナイフだった。木目の柄のついている刃渡り十？ほどの小さなリングの皮を剥く為のナイフ。

それを見たのは二回目だ。彼女があの子猫を終わらすときに見たナイフ・・・その鈍く煌めく切っ先。

それを見ても俺は不思議と恐怖は浮かばなかった。

「マコトくん？」

ダークは、無感情な顔で寂しげな口調をしていた。

「わたし残念よ。本当に残念。胸が痛いわ・・・この痛みはいつたい何なのかしら・・・。」

人形のような平淡な貌。その黒色の瞳からまた一滴の涙が流れ落ちる。左手はナイフを持ち、右手はその痛む箇所をギュツと掴み押さえる。

「わたし・・・あなたならきつと、分かってくれるとおもったのね・・・でも

きつとお互い違う所に居たんだね。きつと似ていてもちよつと、大事なところが違ったんだね。本当に残念。本当に悲しい。さようなら。さようなら。」

ゆつくりと振り上げられたナイフ。胸を握りしめ押さえる彼女。その悲しそうな姿を俺は生涯、忘れることはないだろう・・・。忘れることは無いはずだった・・・。

だってそうだ・・・この世で一番美しい・・・この時俺はそう感じたのだから・・・。

/ 4

これは？・・・なんだ？

暗闇？・・・なのに手が壁を触っている。暗い箱の中？そういったイメージが出来上がるような狭い場所。

息苦しい・・・あの刹那。鮮明に思い出される、ダークの振り上げたナイフ。悲しそうな表情。寂しげな彼女。何もかも・・・夢だったのか？

だとしたらここは？

俺は目を覚ましたんだろうか、あたりは何も見えない暗闇。彼女はいない。母さんも友達も父さんも、学校も無い・・・。

そうだ・・・阿乃連枝に・・・。

そう思い出しかけたときだった。

巨大なカメラでシャッターを切られたようなすさまじい閃光が暗闇を真っ白に染め上げ、再び俺は深い記憶の底へと追いやられていった

「ショックは強いようですね。二三日は入院された方がいい。」
誰かが耳元で会話をしている。薄目を開いた向こう。俺の隣に白衣を着た男と母さんが立って深刻そうに話をしていた。

ここは？どこだろう・・・。

意識がもうろうとしている。記憶さえ定かではなかった。

俺はあの時、ダクに刺されそうになった。それからどうしたのかいまいち、覚えていない。思い出そうと懸命に目をつぶるが、そうすればするほど頭が痛くなった。

頭痛が・・・まるで頭蓋骨の両端を万力で固定されてはさみ締め付けられているような痛みが・・・しかし、叫びも上がらない。

母さんは白衣の男に「お願いします」となにやら頼んでから部屋を出て行った。そういう音がした。

俺は何も思い出せないなので、しばらくして目を開いた。

そこは白い部屋だった。小さな一室。花瓶の立てかけられた台と窓。俺が寝ているのはパイプベッド。

殺風景な部屋だ。安物のホテルのように見えなくもない。

臭いがする。消毒の臭いかもしれない。かすかに鼻をつく薬品の臭い。嫌いではない。

俺は病院なのだろうか？

そう思った時、白衣の男が目の前に現れた。

「どう？気がついたかい？」

彼は黒縁の眼鏡の物腰の柔らかな童顔のかなり若い男だった。屈託のない笑みを浮かべて俺を見据える。徐に隣の丸椅子に腰掛けた。

ここは・・・？

「うん、病院だよ。」

病院・・・。

なんの？

「ん、キミは病気って訳ではないけどね。ちょっとショックが強かったみたいで丸一日目を覚まさなかったんだ。」

・・・そうだ。

ダアクは？

「ん、何か覚えているかい？」

彼は医者らしい・・・。白衣を着ているのだから当然だ。とする
とこれは診察だろうか？

俺は男の質問に答えることにした。

はい・・・たくさん、覚えています。

「たとえば、どういうことを？」

思い出す。彼女との思い出を・・・そして彼女は今・・・。

そんなことより、ダアクは今どこなんです？

俺は医師の言葉を振り払うように言った。

医師は微笑む。そして短い吐息を落とした。

「木村青子さんね。ダアクじゃない。いいかい？」

・・・。

知っている。そんなこと。でも彼女は自分の名前を好きではなかった。

「そうだ、今日はゆっくり休みなさい。明日また、話をしよう。」

突然、医師は立ち上がる。そして俺が引き留めるまもなく部屋を後にした・・・。

いったい、今、何が起きているのか、まだ頭がこんがらがって
いて理解できない・・・。

その日は、そうしてベッドの上で横たわって彼女のことばかりを
考えていた。

俺が病院に担ぎ込まれたのだとすると彼女はとうなったんだ？い
や、第一にあの時、俺は彼女によって殺されるはずだった・・・。
なのに・・・どうして？

全てがうやむやだ・・・。あの瞬間からあとのことは何も覚えて
いない・・・。訳が分からない・・・。まったくここはどこなんだ

ろう……。状況がうまく飲み込めない。

翌日、母さんが見舞いに来た。一週間会ってないわけでもないのに、すごく久しぶりに感じて懐かしさと安心感を感じた。

母さんは俺の好きなスニッカーズなどのお菓子を持ってきてくれた。

事件の話は出なかった。でも違う会話はいっぱいした。話では俺は明日か明後日には退院するらしい。母さんは去り際に

「マコト・・・愛してるわよ。」

と意味不明な愛情表現をした。そして阿乃連枝という俺の担当医に深く頭を下げた。阿乃連枝は

「では、予定通りに治療を行いますよ。いいですね？」

と何かを念を押して確認した。母さんはコクリと小さく頷くだけだった。

俺は母さんの後ろ姿を止めたかった。行って欲しくなかった。でも声は出ない。よく考えたらずっと出てない。

さつき母さんと話をしているときも出ていなかった。頷いたり首を横に振るだけでしか意思表示をできない。その時、その事実に初めて気がついた。

声が出ない……。

母さんが去った後、阿乃連枝という医師は昨日のようにまた隣の丸椅子に腰掛けた。すごく、くつろいだ感じで、笑いかける。

なんだろう？この人の雰囲気は人を安心させる……。直感的にそう感じた。

あなたはお医者さんですか？

「うん、そうだよ。」

今、また気がついたが、どうやら阿乃連枝は俺の口の動きだけで言葉の内容を読み取っているようだった。読唇術ってやつだろうか？

とにかく昨日もそうして話したから。俺は言葉が出ないことに気がつかなかっただけ。

「マコト君。キミはあの日、見回りをしていた用務員さんに助けられたんだ。思い出せるかい？」

阿乃連枝は優しい口調でそう言っただけ俺の中の記憶を掘り起こす。

俺は阿乃連枝に説明されるうちにだんだん思いだした。

あの時、たしかに俺は彼女の振り上げたナイフによって突き刺される場所だった。ナイフの切っ先が目と鼻の先に近づくまで恐怖は感じなかった。むしろ俺は覚悟した。俺は彼女を裏切った・・・殺されて当然だとさえ心の底で思っていたように思う。

なのに、あの時俺はあの鋭敏なナイフの鈍い煌めきに、最後には屈した・・・。死という名の恐怖。終わりという名の絶望。それを甘んじて受け入れられるほど、やっぱり俺はこの世に絶望もしていなければ飽きも諦めもしていなかったらしい。そんな諦観、まだ六十年以上も先の話なのだろう・・・。

俺はあの時、一瞬にして全身に暗闇の稲妻のような死の恐怖を認識して、自分でも知らないうちに彼女の攻撃を紙一重でよけた。

まさかの空振りに刹那的な放心をくらう彼女。よろめく俺。襲う死の恐怖。それは俺に逃亡以外の判断を与えなかった。

机や椅子、辺り構わず俺はぶっ倒して押しのけて教室を飛び出そうとした。

しかし、あまりにも慌てていたため俺は入り口のドアで足首を捻って転んでしまった。

絶望的な状況。死の恐怖を背後に感じる圧迫感。恐怖は見たくない俺に見ると言う。脳が、本来なら拒絶するはずのモノを逆に窮地に陥ったときに麻痺させて許容しようとする行動。すなわち俺は振り返った。

俯せに転んだ状態で身体を起こし振り向いた先に彼女は無感覚の表情をそのまま立っていた。

ダークは笑わない・・・。

きつと笑い方など最初から知らなかったのだ。そんな顔をしている。まるで人形のように表情の作り方を知らない人の顔。その瞳だけがうつろに・・・闇をうつしだしていた。

徐に俺に歩み寄り彼女はしゃがんだ。黒い瞳で俺を見下ろして、また一滴の涙をこぼした・・・。

水滴が俺の頬に落ちる。

俺は身体が動かない。まるで金縛りだ。もはや緊張の糸がMAXに張り詰められて脳が一人で俺の体中の筋肉の全てに長期休暇を命令してしまったようだった。

黒い瞳が俺を見つめる。まるで蛇に睨まれた蛙。

彼女は笑わない。ゆっくり俺に顔を近づけると、その柔らかい唇でそつと俺に口づけをした。

それはまるでゼリーのように瑞々しくてスポンジのように柔らかく、とても甘く切なく熱い感情をもたせした・・・。

俺は泣き虫な方じゃない・・・。なのに、彼女の口づけが、その唇が触れるだけで何もかもが熱くなって目の裏側が急に熱気を帯びて、涙が溢れ出して止まらない。

彼女の涙が唇を伝って俺の体内に・・・。ダークの涙味・・・。

まるでお互いを確かめ合うように優しくそして暖かい口づけ。俺はそのまま彼女を抱き寄せて抱きしめて離したくないほどの愛情を感じた。

それなのに彼女の口づけの後すぐにナイフが俺ののど元にヒンやりとした冷たい感触を押し当てる。

「さようなら・・・。」

そつと口づけを解くダークは無表情のままだった。なのに・・・その瞳は今も尚、涙の雫を流し続けていた。。

—— キミ達っ！ いたいそこで何

をやってるんだっ！」

そう・・・最後に、誰かがそう言っただけにナイフを突きつける彼女を引きはがしたんだ・・・。

俺は保護される瞬間までずっとダークを見つめていた。人に邪魔されてふと何が何だか分からないように放心した彼女はまさに一体の活人形そのものだった。

そこまですごい出し話すと阿乃連枝は終始まじめに俯きかげんに聞いていた顔を上げた。

「マコト君。私はね。キミのお父さんに昔大変お世話になったんだ。」

急にまったく関係のない話だったので俺は虚を突かれた。阿乃連枝は微笑みながら語る。

「だから今回キミの治療を承諾してこの病院に来た。いわば、まさにキミ専属の医師なんだ。」

キミの病状は彼女、木村青子さんと比べたら健常者とがん患者くらいの差がある軽度なモノだ。精神的に急激に負担のかかるショックのせいで一時的に言葉を失ったり一部の記憶を持って行かれてしまっている状態なんだ。」

わかるかい？と阿乃連枝は言っただけ、花瓶の置かれた小さいテーブルのような台の上のフルーツバスケットからリングを一つとって徐々に皮をむき始める。

そのあからさまに手に持つ、果物ナイフを、その鋭い切っ先がリングの皮をまるで水でも切るかのようにスイスイと剥いていくのを見て、俺は瞬時に胃の中のモノが逆流する激しい悪寒を感じてもだえた。

阿乃連枝は苦笑した。意外に露骨なことをする人だ。さっそうと果物ナイフを見えないところに隠すと阿乃連枝は少々後味悪そうに

再び言葉を続けた。

「このように今後キミの言語が回復して記憶も戻っても、後遺症が残ることがかなりの確率である。」

後遺症・・・てことは俺はナイフとか見る度に今みたいな拒絶感に身体全体が襲われるって事か・・・。

そんなの絶対嫌だ・・・。

「うん、嫌だよ。キミのご両親もそう言ってらしてね。キミのお母様と木村さんのご両親の方で話し会った結果。私がキミの嫌な記憶を全て消してしまうことになったんだ。」

どうだろう？キミの同意も聞いておこうと思うのだけど？そう言う阿乃連枝のまるで草食動物のような無害そうな顔を眺めて、俺はしばし口ごもった。

記憶を消す・・・。そんなことができるのだろうか？そしてそれができたとして、俺は本当に彼女を忘れられるのだろうか？否、忘れていいのだろうか？

部屋は明かりが消され、昼間なのにカーテンが閉められ、ほとんど明度がない。しいていえば閉められたベージュのカーテンからは外の光が厚い生地を抜けてオレンジ色に少しだけ部屋を明るくしていた。

雰囲気作りは大事だそうだ。部屋にはヒーリング効果のある草花の香水が適量立ちこめていて、今にも眠りにつきそうな予感を与えた。

「キミは琴乃葉真琴・・・。」

俺はベッドに横になったまま、阿乃連枝の言葉に静かに耳を傾ける。それはまるで子守歌のようだった。

「キミは遠い昔に戻る。」

昔、遠い日を思い出す。保育園に通っていた頃だ。お昼寝の時間

があつた。いつも眠くなくても寝なければいけなかった。教室に敷き詰められた布団。電気の消された部屋。誰かのかすかないびき。遠く、部屋の入り口、ドアの隙間から入り込む外の明かり……。どことなく寂しい……。どことなく悲しい。

意識が狭窄していく。誰かの声はまだかすかに続く。

「キミは……。道を歩いていて。見覚えのある風景、見覚えのある場所。そこは……。どこ？」

竹林の隣の細い道。暑苦しいセミの鳴き声。涼しげな音楽。白い洋館。向かいのテラス。開け放たれたベランダ窓。たなびくレースのカーテン……。彼女の微笑み。そして黒い眼差し……。

小さな漣のように意識が近くなったり遠くなったりする。現実と幻想が解離を忘れ融合していくような錯覚は、まるで……。心が宙に浮いているようだ。

「登校の道。見慣れない後ろ姿。キミは誰と出会った？」

赤いランドセル。潰れたネズミの死骸。微笑む少女。小さなゴミ箱。

もう、これは意識じゃない。夢でさえない。まるで走馬燈のようだった……。映像が最近のことを色濃く再生する。

その時にはもう、誰かの子守歌のような囁きはいらなかった……。

俺は独りでに思い出し、独りでに口パクして語ったことだろう。

誰もいない放課後。二人だけの教室。半死の子猫。彼女の微笑。

黒い瞳。取り出すナイフ。鋭利な切っ先。微笑む彼女。半死の子猫。逃げる俺。走る俺。恐怖恐怖恐怖、そして、切なさ……。

終わりを渴望する手紙が……。ノックする。彼女が来た彼女が来た彼女が来た。

朱に染まる教室。朱く燃えるカーテンがたなびく窓辺。独りの影を落とす。

「彼女は……。だれ？」

ダアク……。独り終わりに魅入られし者。

それは高い共鳴音だった。耳のどこからか大音量の耳鳴りが巨大な鉄板を尖ったモノでひつかいたように鳴り響いた。

鼓膜が小刻みに振動し。脳がシャッフルされシェイクされ濃厚なカクテルにされているような感覚がする。映像の小回りがフル回転で巻き戻されたり早送りされたり止めどなく意味不明。

まるで全力疾走でバカの振りをするような感じ。そのうちに力尽きてきてしだいにペースは遅くなり、朽ち果てる。

—— 闇の中に落とされた……。

「ええ、催眠療法により狭窄した意識から例の記憶のみを無意識に移しました。」

「うまくいったんですね。よかったです。」

「はい、もう後遺症の心配はほとんど残されていないと思います
が、」

「が？」

「ええ、いちおう無意識に記憶を隠したからと言って後遺症が全て消え去るわけではありません。」

「はあ？」

「元々、ヒステリーなどの後遺症は無意識の防御本能により覚醒します。ですから無意識に記憶を全て隠蔽した以上、なんらかの後遺症が現れた場合、それは彼にとってまったくの不明的な悪癖や性質のようなものとして曖昧に理解されるでしょう。」

「それじゃあ……」

「大丈夫、安心してください。またしばらく様子を見て、後遺症の類が見つかった場合、治療を再開しましょう。」

「はい、そうですね。本当にありがとうございました。」

「どうも、お大事に……。」

「さあ、帰りましょう。マコト。」

母さんは診療室から出てくるとそそくさと俺の手を引いて病院の出口に向かう。

結局、俺はここに何しに来たのだろうか？だれかのお見舞いだっただけかな？

とにかく早く帰って、遊びたいよ。なんたってせつかくの夏休みなんだから……。

/ 5

そんな……バカな……。

見ていた。俺はいつの間にか外からあの頃の俺を見ていた。右も左も上も下も分からない暗闇の中、まるで目の前に一枚のスクリーンが沸いて出たようにして、何事も無かったかのようによそよそしい顔で病院を後にする俺を映しだしていた。

「おい！行くな！。忘れるな！思い出せ！」

俺はスクリーンに張り付いて叫んだ。母さんに手を引かれ去っていく十二歳の俺を止めたかった……。

スクリーンはスクリーン。どんなに触れても触っても固い壁。ただの映像……。うちひしがれて頂垂れた……。そんな刹那、

「お兄ちゃん。」

唐突に誰かが背後で呼んだ。振り返るとそこにはお面をかぶった少女が一人立っていた。彼女のつけているお面は前にテレビのCMで見たことがある三人組の魔法少女の中の青い女の子のお面だった。

「お兄ちゃん。どうしてそんな暗い顔してるの？」

背丈からして小学校低学年かそのくらいだろうか？少女は美しい声をしていた。どこかで聞いたことがあるような透き通るような声だった。

それにここは暗闇だとばかり思っていたが、明かりがないわけではないようだった。何故なら目の前の少女も自分の手も足もよく見たらはつきりと色が付いて見える。

どうやらここは単に全ての背景が無いだけなのだ……。ちょうど宇宙空間のように。ちょうどそう思った時、おれはどうやら宙に浮いているらしいこともわかり足が地面を見失った。

「お兄ちゃんね。大切なことを忘れてたらしいんだ。」

切ない思い出にため息を漏らしながら答えた。

「ねえ、ソレってどのくらい大切なこと？」

「すっごく……。すーっごく大切なことさ。」

少女と俺は暗闇とも言えない暗闇の中、たわいもない会話をした。

少女は俯き項垂れる俺の隣にチヨコンと座っていた。

「その女の人のこと好きだったの？」

「……。うん、好きだったんだねえ。今も、昔も……。」

「知りたい？」

「え？」

突然、少女はそう訊いてきた。

「その女の人のこと、もっともっと知りたい？」

その透き通るような声は深みを増す。

「……。うん、知りたいよ。彼女のこともっともっと分かってあげたい。」

「教えてあげようか？」

「……………」

言って少女は徐に自分の顔の前のお面に手をかけた。

「でもその代わり、」

ゆっくりとお面を外しながら

「責任、」

彼女は愛らしい微笑みを浮かべた。

「とつてね。」

小高い崖の上、月夜に遠吠える一匹の狼の様な瞳が黒く輝いて、俺は絶叫のような墜落と共に、シーンを切り替えられた……。

桜の花びら……。季節は3月の上旬。

ピチヨン

。響いたる音が

流しに水滴が落ちる音が響いた。誰もいない家。独りきりのはずの場所。

茶の間で俺と向かい合っていたのは二人の少女だった。

何とも言えない、堅苦しい雰囲気。双方が相手を覗って一言も発さない……。

向かい右手に座るのが黒髪の長い色白の少女。かわって左手に座るのが青髪の短い桃色の少女。

そうだこれは姉妹だ。あの二人が最初に家に来たときの記憶だ……。そう気が付いたとき、同時にこうも思った。

この時、姉妹さえ現れなければ……。この姉妹と出会ってなければ俺は今、こんなことにはなっていない。クロトとも出会わなければ、今までの変な事件にも関わらずにすんだ……。

そう思うと、だんだん猛烈に怒りにも近い憤りを感じた。

冗談じゃない……。ここでこいつらを受け入れてしまったのが元々の運の尽きだ。

俺は逃げるぞ！

何故だろう。思考回路がだいぶおかしな事になっているようだ。

俺は目の前の姉妹を刺すように睨むと憤然と立ち上がった部屋を出た。

短い廊下を渡る最中、後ろから何やら姉妹の訝しげな声が聞こえたが、関係無い。もはややつらが出て行かないというのなら俺が出て行くまで、雄々しくも勇気ある決断と共にさあ俺は歴史に名を残す第一歩を踏み出す。玄関を開けた。

れ？

足の裏が地面を知らないような感覚。てか玄関を開けたそこは真っ黒な世界。てことは……。下はやっぱり、ほらね、何もなくてことは落ちるだけ……。

ギャーっというまに真っ逆さま、はいお陀仏……。

ドスン……。とか露骨な表現だけど、俺が落ちた先は何故かまた、家の中。

うちの廊下だった。

はて？まあ、幸い手や足を確認するとちゃんと存在するので生きていたらしい。

「おい・・・マコト、おまえどっから落ちてきてんだ？」

「・・・非常識なヤツだな。」

玄関の前に姉妹が至成学院の制服を着てカバンを持って立っていた。セイカの方がさつきと違って茶色い地毛に戻ってるって事はさつきの話とはまた時間的に経ってるっぽい。

二人は俺の不自然すぎる登場の仕方に怪訝そうながらも別段問題視するでもなく、疲れたと肩をコキコキしながら茶の間の方へ入っていつてしまった。

どういうことかさっぱりだ。とにかく後を追おう。

茶の間に入ると姉妹はテレビをつけながら二人してちゃぶ台に項垂れてゲンナリしていた。いつの間にか私服に着替えているのに俺は気が付きもしないのがバカである。

あれ、今までののは全部夢だったのかな？そうだ、妙な夢を見ていたんだ。おかしい夢だった・・・。

「なあ、俺さつき変な夢見たよ。」

思いもしないのに勝手に俺は夢のことを姉妹に語り始める。そしてさつきまで指一本動かせないような疲れ切っていた姉妹も急にまじまじと俺の夢の話聞き始める。

終始、淡々と語り始めて、終わると、同時に姉妹が口を合わせて言った。

「マコト・・・後ろ後ろ。」

ん？なんだろうつと振り返ると・・・。二人が指さす方へ

黒い瞳が静かに笑って。

ハァーイ、マコト君。

俺は叫びにもならない悲鳴を上げて気を失った。

歩いていた。気が付くと道を歩いていた。駅までの道のり。緩やかで長い坂を登る。ずっと向こうの小学校の方の坂だと急で短い坂になる。

金城の駅まで行くつもりだった道だが、しばらくして気が付くとどうやら違った。登っていたと思った坂道はいつのまにか川沿いの土手。土手の一本道から橋を渡って歩く。

思い出した。これは中学校の頃の通学路だ。

ということは紺色のブレザー、やっぱりおれも中学生だ。

風景もどことなく懐かしい感じに戻っていた。今は一家で田舎に引っ込んだはずのあの角店のおばさんも、後に黄ばんで汚くなる白い壁の建て売り住宅の四角い家々も、取り壊されてゴルフグッズの専門店になるはずの十字路のコンビニも、携帯電話の普及とともに消え去ったはずの電話ボックスさえまばらに見受けられる……。

と、突然あたりは夕刻の色に染まった。俺は河川敷に立っていた。誰かが堤防の近く高架橋の下でバスケットボールをしている……。それは俺だった。

先輩達の代から愛用されていた河川敷のフェンスとゴール。ソコにいたのは四人だった。俺と友達三人。時期にそのうち一人がみんなの輪から外れて遠ざかっていく。家に帰るらしい。

お仲間達はみんな彼を見つめて不満そうな瞳をしていた。俺だけはいつまでもバスケットボールを打ち付ける音を止めなかった。

後悔が切なく胸を締め付ける。脳が映像をだんだんベールをかけるように朧気にしていき……。次のまばたきと一緒にシーンは変わった。

走れ、走れ、走れ。

何故？

何故も何も無い。とにかく走れ。

いや、でも何だって・・・俺はこんなところを走っているんだ？

そこは夜の一本道。右に見えるのは有名進学中学校の監獄みたい
に長い外壁。左には宅地。俺は走る。そして思い出した。

そうだ、誘拐された緑川永遠の事件。そのアリバイを崩す実験
をコクハに頼まれてやっているんじゃないか・・・そうだ、たし
かそうだった。

思い出してくると少し安心して走った。でもしばらくしても、ゴ
ールが見えてこない。

あるはずの寿司屋裏手の駐車場。セイカが待っているその場所に
いつまで経ってもたどり着かない。

それどころか良く前を見てみるとどうだ・・・道は果てしなく
一本に伸びていて、遠くの方は闇に包まれて見えない。まるで地球
のマントルに達するぐらいまで掘られた長い縦穴を真っ逆さまに駆
け下りているような気さえする。

俺は唐突に止まりたくなった。怖くなった。このまま走っていた
ら何処に行くのか？その暗闇の先を見て、絶望にも似た悪寒を感じ
ずにはいらなかった。

まるでそう・・・死の様な恐怖。

でも足が止まらない。それどころか、後ろから誰かの走ってくる
らしき音が聞こえた。早い足音だ。まるで俺を追いかけてきている
ような足音。それとともに首筋に誰かの息が吹きかけられる。

フウフウ・・・。

耳元で誰かの荒い息が弾む。真後ろに迫っている。

俺は追われている。背後にぴったりと着いてきている。
逃げなきゃ・・・。

猛烈にいわば逃走本能的なアレが押し寄せる。
さっきまで前方の闇に感じていた死の恐怖が立体化して、今度は
背後から迫ってきた感じた。

はつきりと感じる息や足音ははつきりとした恐怖に・・・そして、
俺に止まることを許しはしない。

でも、全てのモノはいつか終

わるわ。

誰かの言葉。右か左か？どこからか突然聞こえた。それが合図の
ように・・・俺の目の前の道が突然消え去った。

あとに残ったのは地面に足の着かない。落下を余儀なくされた俺
だけだった。絶叫的な降下とともに、意識が薄らぎ・・・脳みそが
シャットダウンさせられた。

暗い・・・。

まるでほの暗い沼の底。水面に近づく。暗緑色のいくぶんか透き
通った水の底から、やんわりと世界が顔をのぞかせる。

暗い・・・。暗い・・・。暗い・・・。

ドロっとした世界。まるで黒いペンキがそこら辺から滲みだした
ような気分。誰かが呼んでいる・・・。

「マコト君・・・。」

何度も、何度も繰り返し俺を呼ぶ。次第に脳みそが自分の名前から順にいろんな事を知り直す。

出身地、体重、身長、学歴、容姿、声色、癖、好物、コンプレックス、メモリー。

一瞬だ。人間は眠りから覚めるとき再び生まれる。一瞬の誕生。意識の起動音とともに人は以前の記憶を無意識から再び追記される。ゆっくりまぶたを開くと世界が変わった。

暗室？

電気が付いていない。カーテンも閉まっている。かすかにカーテンを突き抜けて入る外光。ほの暗い一室。

俺は長いすを倒した上に寝転んでいた。小さなデスクに本や資料が山積みになされている。その手前の椅子に童顔の男が座っていた。

黒縁のいかにも無害さを装ったような丸い眼鏡。温厚な顔立ち。彼は白衣を着ていた。

無益な仕事を引き受けるバカな医者か・・・それでなければ自然保護団体所属の学者だろう・・・男はそんなお人好しな雰囲気をしていた。

「目が覚めたかな？」

言いながら男は立ち上がって俺を見据えた。優しい微笑みだ。さつきまで見ていた怖い夢がウソのように安らぐ。

「俺は？」

「キミは夢を見ていたんだよ、マコト君。」

訪ねると間髪入れずに返事が返ってきた。

夢・・・たしかに全て朧気な記憶だ・・・。それによく考えれば現実味のない・・・。

「でも、どこから？」

そう・・・どこから夢でどこまでが現実だったのか・・・それさえアヤフヤだ。

「マコト君。キミ、今が何月何日だか覚えているかい？」

「え・・・十一月十八日ですか？」

ふいに答える俺に医師は皮肉そうな顔を浮かべて首を縦には振らなかった。

「違うよ、マコト君。それは違う。」

そう言っただけで医師は突然、ちょうどいいことにデスクの上にカレンダーがあつたらしくそれをとって俺に差し出す。

医師の指が示す方向には三月二十八日という日付が記載されていた。

「これは？」

こんがらがった記憶・・・。こんがらがった頭。きょうはいったい何時なんだ？十一月だと思つてたらその八ヶ月も前だなんて・・・。じゃあ、今まで俺が生きてきたこの八ヶ月間はいったい何だったと言うんだ？

正直、受け入れがたい事実・・・。俺は頭を抱えて放心状態に近い心境に呆然とした。

「キミは夢を見ていたんだよ。ずっとね。」

医師は疑問が既に飽和状態になつて愕然とした俺を隣に説明を始めた。

「今日、キミは気分が悪くて編集社に言つた後この精神科医に訪れた。最初、キミは私に自分の今の生活への退屈感の苦悩を語つた。キミは小学校の頃からもう、かれこれ十数年以上も世の中がつまらなくてつまらなくてしょうがないと言つていたよ。」

そこで私が、催眠療法で治療をしようと思つた。キミに術をかけ始めてからかれこれ四時間ほどしか経つてないが、キミは感じたはずだよ。

八ヶ月間もの間、不思議な不思議な世界で色んな体験をしたはずだ。

それはキミ自身の神経が作り出した偽物の現実。夢だ。

キミの中のスリルのある世の中を体験したいという願望が本当な

らないストーリーをでっち上げて、その上でキミは決まった配役として劇を楽しんだんだ。

まるで道化。」

医師はだんだん流ちょうに早口で語っていく。それはまるで嘲笑するようだった。最初のイメージとは変わって狡猾さのあるしゃべり方。高低を繰り返す声の高さ。耳鳴りのような嘲笑。

「だいたいおかしいじゃないか？ そんな姉妹・・・最初からおかしかったんだよ。」

そう言つて「アハッ」と快感そうに俺をあざ笑った。

俺は呆然自失・・・。

全てが白紙。

この数ヶ月間は、全部、俺の夢だったというのか・・・。
受け入れる？ 受け入れないは置いておいても。それはどう受け入れていいのか分からない問題ではあった。

隣で未だ、高らかとあざ笑い続ける眼鏡の医師の声がだんだん遠くに消えていく。まるで漣にさらわれるように俺の意識は朦朧としていき、世界が再び闇に包まれたとき、俺は俺では無い何かに入り込んでいった。

l u e s (A +)

B r o k e n B

人間は生きている限り独り

小さな喜びも大きな悲しみも

誰一人同じように味わうことはできないのだから独り

マッチ箱のような狭い場所で

ひとしきり誰かのことを思つて泣いても

誰一人気付いて手をさしのべてはくれないのだから独り

人間は神経衰弱とは違う

机の上に幾枚ものランプを並べて

必ず一つはあるペアのカードを見つけ出すことはできない

同じ考えを持つ人も

同じ志を抱く人も

本当は違う色違う思い

誰もかもわかり合う事なんて不可能

誰も本当のわたしを分かってなどくれない

だから人間は自分に嘘をつく練習をする

これはいけない

あれはいけない

こうしないといけない

ああしないといけない

様々なルールがわたし達を同じ色に染め上げ

世界は嘘一色に染め上がる

そんなのわたしは厭

あれをしたいと思うのも

これをしたと思うのも

全部わたしの勝手だもの

好きなモノを好きと言って

好きなことを誰にも邪魔されずやって

それを否定するのはわたし自身を否定のも同じ

殺される前に殺すのは当然

全てのことはどうせ、終わってしまえばゴミ同然

何もかも分かってももらえないのなら生きていないのも同じ

それに疑問を持つのはまるで青色

深い深い海の色

遠い遠い空の色

誰も手の届かない

寂しげな色

それが嫌い

だから

さようなら分らず屋な世界

さようならわたしの中の大切な青色

だって

それでもわたしは

悪くない

/ 6

アオコ・・・おまえは間違っているんだ。

意識が蘇ると俺は誰かの心の中にいた。彼女の記憶と思考が俺の脳に映像と思いとして伝わる……。それは何とも言えない黒い固まりが渦巻くような複雑とした気持ちだった。

昔からそうだった。

ママもパパもお兄ちゃんもみんなそう……。誰一人としてはわたしを許してくれる人はいなかった。誰一人わたしを受け入れてくれる人はいなかった。誰もかもが理解してくれないのなら生きていないのも同じ。

いつもわたしは独りだった。

彼女の心の中はそればかりだった。憎しみとも怒りとも侮蔑とも受け取れないような、ただ一言、孤独・・・その言葉だけがふさわしい・・・。

今だって彼女はそう、独り。ここがどこなのか現在地がはつきりしないような病院の病棟の病室。一人部屋の一つのベッドの上、一個の窓の外の一つの世界を独り眺めている。

白い壁が閉鎖的に自由を奪うここはまるで牢獄。彼女という人間にぴったりの場所。小さな窓が鉄格子によって外に顔が出せないようにされているのは、ここがそういった状況が危険な患者が入る部屋だからだ。

窓の外、彼女が眺める風景、その両斜め隣に二つの大きな病棟が見えて、その向こうはずっと森林が広がっている。きっとこの病院自体が広大な森林の中に建てられているのだろう。

彼女がいる部屋は眺めの高さからして5階以上8階未満という感じだった。

小さな与えられた個室。出入りは不自由。決まった時間以外に外に出ることは許されていないと彼女の記憶が語る。あたりまえだ、ノ工医科大学付属ソエル記念病院、それは脳神経科と複合した歴とした精神科病院だそうなのだから。そこに入院している彼女ももちろん、精神障害者の類であるのだそうなのだ。

まあ、勝手に言ってるってかんじだわ。

彼女は吐き捨てるように思った。

その思いは、彼女のどこが精神に異常を来しているのかという、そこから疑問を持つほど愚かなモノでは無い。そうじゃなくて、彼女が一番不満なのは異常者を治療しようとする必要性に懐疑的なだけ。異常者であるか無いかは彼女にとって問題ではないのだ。むしろ

る彼女の価値観からしてみれば異常でない人間の方がよっぽど不自然なくらいだ。

この病院に入院して何日が経っただろう……。それを彼女はほとんど覚えていない。ここに来て数日、彼女はずっと呆然自失でどこか見えない遠くに思いを馳せていた。

すなわち、彼女の身体は空っぽだった。

思いだけがどこか違う世界で生きている。まるで目が覚めていても夢を見ているような状態だ。

彼女は人一倍寂しがり屋だった。独りが死ぬほど嫌いな子供だった。それは人一倍孤独の意味を知っていたからに他ならなかったし、それに人一倍孤独につきりきっていたからでもあった。

昔から何をやってもそう。誰一人彼女のすることに理解を示してはくれなかった。

保育園の頃。遊具場の横でたった一人セミの抜け殻ではなく本体の死骸を集めて回っている、みんなに奇妙なモノを見る目をされて友達の親からはしばしば奇っ怪なモノを見る目で煙たがられた。それでもその頃はまだ良かったと思う。友達の多くは奇妙な行動をそれぞれ多かれ少なかれ持っていた。そして大人達はそういう子供の変なところを見ると苦笑したり気持ち悪がったりするだけだった。でも小学生に上がった。そしてしばらくすると友達達の奇妙な行動は消えていった。指をしゃぶっていた人はいなくなったし、お漏らしもする人はいなくなった、野草や虫を食べる子供もいなくなったし、ブツブツと独り言を言ったり多動症気味に動き回る子供も減った。だんだんみんなは常識的に許容される存在として昇華されていったようだった。

彼女はその頃から思い始めた。独り取り残されていると言うことを。

最初はそう。いつだったかの遠足の時だった。一番はじめに先生が班を決めて列を作って行く。近くの動物園に行くのだ。動物園に入りしばらくして彼女はその列を離れた。良い匂いがした。その時、

みんなはペンギンの生まれたばかりの赤ん坊を見に行っていたが、彼女にはもつと興味のある匂いがあった。

それは動物園内の立ち入り禁止の柵を越えた向こう。細い裏道を通って建物の入り口に入ったところにいた。檻に入った一体の雄の象。年老いたインド象。

象はしなしなに倒れていた。呼吸をするのも精一杯そうな疲れ切った様子だ。軽トラックのように太い体躯が重々しく横たわる。彼女は直感的に象の死を予感した。

目やにが固まって張り付く目元。地面に張り付いたように力なく倒れる体躯。時折発する苦しそうなうめき声。変動的で荒い呼吸音。彼女はそれを感じているだけで愉悦だった。

もつすぐこの巨大な命が終わりを迎える。そこにかつて無いほどのきらめきを感じた。

この世にこんなに盛大なモノが存在する。

しいてたとえれば消えゆく炎。一擦りでランランと燃え上がるマッチ棒の先。それが消える瞬間にほのかにバーストする様。その一瞬の輝きが命にも訪れるのだと彼女は学んだ。

思い出す。

もつと小さい頃。ママに内緒でリビングにおいてあったマッチを背徳めいた手でそつと手に取り、中からとりだしたそれに初めて火を点けた日を。

そのゆらゆらと燃え上がる神秘。それが消える寸前発火を強くして消えてしまう予測をさせる切なさ。そして消えてしまった後のあの何とも言えないやるせなさ、そのはかなさ……。彼女は何度も何度も消える度にその消える瞬間の感情の波をもう一度味わいたいとマッチを二度も三度もマッチ箱が空になるまですりつぶけたものだ。

そしてその老いた象の終わり。それがあのマッチ棒の何十倍何百倍も意味のあるモノに感じた。美しいきらめきに感じた。死にゆく象。それを見送る自分。なんて美しい光景。なんて貴重な瞬間。彼

女は感情が高ぶり象が死ぬ直前、どこからとも無く現れた死に神の足音に彼女のあるべき個性というモノを認識させられた。

わたしはそう、ダークなのだ。

その日、用務員が象の小屋で寝ていた彼女を見つけ出したときは、既に夕方近かった。全然関係のないところまで探し回っていた彼女の担任の先生は彼女を見つけると救われたような顔で抱きしめて親元へ送った。

でもそれからよくそういうことがあった。集団行動を乱す。そんなことばかり。誰一人秩序と常識を守って生きている世の中で、彼女だけは浮いていた。それをみんなにとがめられた。

あれをしてはいけない。

これをしてはいけない。

あなたはなんで人の言うことが聞けないの？

ガミガミガミガミ……。

そんな頃からだった。

彼女が他人の言葉をうまく理解できないということに自分自身気付き始めたのは。

わたしは耳が悪いのかしら？

そんな風に思ってしまうくらい人の話が聞こえない。食事に呼ばれても授業中に指されても全く返事を返さないのは無視してるんじゃないかってただ聞こえないだけ。まるでみんなの言語は全て灰色の背景音。興味がないとかそれ以前に何を言っているのかまったく分からない。違う国の人と喋っているような気さえして、もはや誰と口をきく気も無くなってしまった。

それは相手だってそうだ。どの友達もどの大人も。挙げ句の果てには両親さえ。彼女の言葉を理解できずに相手にしてはくれなく

なった。

誰もを理解れないなら、誰も理解ってはくれないもの。それは孤独なこと。それは寂しいこと。でもそれがきつと自然なことなんだ。……きつと……きつと。

きつと、そう呟きながら彼女は自分の中の寂しさを肯定しようとした。それは独りぼっちであるのが真実であるというなんとも受動的な二ヒリズムに他ならなかった。

そして彼女は独りであることをしつかりと認識した。そして決意した。

誰も分かってくれないなら、わたしは独りで生きていくまでだ。

それは死んでいるのと同じだ。そしてそれならみんなも死んでいるのと同じだ。

だって

人間は生きている限り独りだもの。

そんな時だった。彼と出会ったのは……。

病室のベッドの上。彼女は今も尚、ぼうつと郷愁の中に飛んでいた。

脳裏に思い浮かばれるのはいつだって彼との思い出。短かったけど過ごせた日々。壊れてしまった関係。切なくてとても暖かい。

あの日、子猫を学校に持ち込んだ日。彼が見せた表情を思い出すと胸が痛くなる。痛くて痛くて切なくて切なくて……狂おしくて壊れてしまう。だから彼女は自分でもその感覚が分らずに家に引きこもった。どうにかしてこの恐怖にも似たじわじわと責め立てる何かから解放されようと……。全てを拒絶して部屋の鍵を閉めた……。でもダメだった……。まるで彼女の中の何もかもが溢れ出

して止まらないような……それは止まってはくれなかった……。

きつと好きなのね。好きで好きでしようがない。だから殺してしまいたい……。彼がわたしを殺す前に殺してしまわないと、わたしはもう耐えられなかった……。

あの日、誰かが彼女を止めて。彼女は恐怖に引きつる彼の顔を眺めながら心を停止した。

そのままこの病院に運ばれて、彼女は今も尚医師の診療を受け続けている。

彼はどうしてるだろう？

唯一、現在のことで気になるのはそれだけだった。その気持ちだけが彼女にまだ現在への意識の介入を許していた。臆気だが、彼女は、まだ放心しきつてはいないということである。

そろそろ、時間だ。

この部屋には時計は設置されてないけど、ちょうど外から見える景色の正面に西日が降りてきて中間あたりで止まったときがタイム！。次期に白衣を着たナースが部屋に入ってきて彼女を診察室へ連れて行く。そしてまた、あの老人と話すのだ……。まったく、何度やっても何を訊いても同じ答えしか返さないに決まっているというのに……。

「今日は久しぶりに涼しいねえ。夏の晴れ間なのにこんなに涼し

いと逆に温暖化とか異常気象を気にしてしまうねえ。」

いくばくかしわがれた声をした白衣の老人がガラス張りの壁一面に広がった森林を背景にした優雅な噴水広場を見渡しながら言った。歯の隙間をシーシーと風が通るような音が喋るとき漏れるのがダアクはあまり好きではなかった。

初老とはいえ、首だけがは虫類のように前屈みに倒れている姿勢は寝違えたと言うより、この老人がいつも机に向かって難しい医書を紐解いてきた証だろう。それか診察の毎日で患者やデータに顔を近づけてみているうちにそうなったのかもしれない。いずれにせよ、まるで何かを観察するために首だけが前のめりになる進化をしたような、その老人は、とどのつまりその道の卓越者である。

老人の言葉一つ一つが診療の一環。どんなくだらない会話も彼の計算と観察の一環なのだ。

老人のリラックスした雰囲気もそうだが、周囲の状況も点で想像していた医療場の診療といった趣ではなかった。

吹き抜けの広間。白塗りの壁に囲まれた中にはジャングルジムや積み木、テレビゲーム様々な玩具が顔を揃えダアクよりも小さい子から少し年上ぐらいの子供達が我も我もと遊び道具に群がって遊んでいる。彼らも一応はダアクと同じ患者の一人であるらしかった。

そんな子供達の喧噪が賑わう中、ダアクは老人と向かい合って外が丸見えのガラス張りの壁の前の小さなナイトテーブルに腰掛けていた。

老人は会話をとぎらすことなくひっきりなしに彼女に世間話を語りかけてきた。ダアクにとっては子供達の背景音となんら遜色のない言葉に過ぎないというのに。

ダアクは無反応だったが、老人は別段気に病む訳でもなかった。幾百の話題の中に一つでもダアクの反応を促せるモノがあればみつけもんなのかもしれない。

「あれだね。昨日は小学校のゴミ箱に子猫を捨てたのはキミだっ

てとここまで話したんだっけかな？」

しばらくそんな無意味な時間を過ごすとは老人はやつと本題を切り出し始めた。いや、いつもこんな調子だ。最初はゆっくりと始まる。何も関係のないところからこちらをリラックスさせるようにメスを入れて中に入ってくる。それは老人だけではない。きっと彼ら特有の手法のようなものなのだ。

セールスマンのようなものね。

ダークはそう理解している。結局患者を騙して中身を看ようとしているのだ。そんな必要ダークにはないと言うのに。ダークは一つも嘘をつくつもりなど無いからだ。何一つ隠すようなことを感じていないし、情緒が不安定でもないと自覚している。

ただ確かに最近では、この診療の時以外はまるで心ここにあらずといった放心状態が続いていることも確かだった。それに今だって見た目的にはきつと彼女は廃人のよう。あの日から笑いの作り方を失ってしまった。感情を顔に表すやりかたを忘れてしまった。感覚が麻痺していることは彼女も感じてはいた。

きつとそれは確かにみんなの言うとおり病気って事なのね……。

「猫を殺すとき、キミはとても気持ちが高揚して、死ぬ間際の子猫のうめきが愉悦に感じたと言ったよね？」

「ええ、言ったわ。」

「それはどうして？」

「わからない。昔からそうとしか言えないわ。」

「じゃあ、質問を変えるけどキミが子猫を殺したくなった理由をキミは昨日私に衝動的な欲求と説明してくれたよね？」

「ええ、そう。それよ。それ以上でもそれ以外でもないわ。それ

がわたしの全て。」

「うん、それはどうして？」

「どうして？って・・・それは愚問ね・・・」

逆に訊くけど、あなたは目の前に置かれた極上のラムステーキを見て、舌なめずりをしないでいられるのかしら？」

「ん、あいにくわたしは菜食家だね。」

老人とダークとの会話ははたから見えていたら奇妙なモノだった。

何故ならダークは老人の顔をみていない。ずっと老人の向こうでキヤキヤと無邪気に微笑む子供達の姿を目で追っていた。まるで老人は一人で低木に向かって話しかけているようだ。しかし、ダークは老人の質問に答える時だけ必ず気が付いたように老人と視線をあわせる。その繰り返しである。

ダークは見ていた。遊具で遊ぶ子供達を。その一人一人がどういった症状でこの病院に入院しているのかは知らない。子供達のほとんどが一人で遊んでいたが、中には友達を作って遊んでいる子供もいた。その子供でさえも今、自分の目の前で一緒に遊んでいる子供のその病状を知っているかどうかは定かではない。

人間はどうしてこんな不信な世界に安心して身をゆだねられるのだろう？誰一人として本当の自分を知っている人間なんていないのに。彼らはそれに恐怖や寂しさを感じたりはしないのかしら？

それこそおかしいことだわ・・・。

今、自分がどうしてここに存在しているか・・・。それさえも掴めずにただ漠然と生きている。鼓動がなっているからただそうして動いている。それは何も考えていないロボットと同じじゃない。

わたしは違った。

ずっと昔からわたしはわたしの正体がダークだと知っている。それは終わらすことを宿命とする、それを衝動とする存在。だからそれを知ったおかげで寂しさや恐怖に打ち勝つことができる。わたし

は独りでも生きていける。

きっと彼らはまだそれを見つけてはいないから。漠然と生きている振りをして、その途方もない疑問から目をそらせ続けているんだわ……。

でも彼は違った。

マコトくん……。あなただけは他の人達と違った。わたしと同じ匂いがした。

何もかもを諦めたような、知った表情。

だからわたしと彼は惹かれ合うように出会ったというのに……。ねえどうして？

わたしはあなたみたいにはなれないのかしら？

黒い瞳。彼女のその孤狼のような眼から一滴の涙がわき出た。

白衣の老人はピクリと眉を動かした。そして探しただろう。今まで自分が口にしたどの言葉に少女が反応したのか……。脳裏でこれまでの言葉を反芻しながら考えただろう。しかし、老人の言葉に彼女の心に届いたモノは一欠片もなかった。

ダアクの心はいつも少年の元にあった。それは誰も入り込めない領域。ダアクだけが気付いてしまった、本当に望む人間の姿。

それは、とても暖かくて。絶対に味方で。最後には厳しくて。簡単には終わらしてくれない。

それは……。きつと、

優しさ……。

【朝倉誠二の調書】？

木村青子。

症状は、偏りのある自虐的な思考性。人間不信。自律神経は今現在では失調しかかっているが、これは二次的連鎖的なもので、彼女自身の平常状態ではまったく異常はない。

彼女は異例のタイプだ。子供の精神疾患では両親や周りの人間による影響で極度のストレス、いわばショックを受けることで発症するのが基本だが、彼女にはまったくそれが無い。

裕福だが束縛のない何不自由のない家庭に生まれ。日々の日常は習い事にピアノがあるぐらいで平凡。とくに英才教育を施されたわけでもなければ、両親による虐待も見受けられない。

あまりにも正常すぎる暮らしの中で、彼女がどうしてそんな極端な性質を手にしてしまったのか、その起源がまったく分からない。

過去の事例と照らし合わせても彼女の対人関係の中に精神疾患を誘発させるような存在は調べれば調べるほど皆無に等しく、彼女自身に質問を続けてもその糸口はますます小さくなるばかりで複雑性を増す。

いわばもはや彼女のこの精神的な異常性は発生時からのモノと考えてもいいのだ。それについてなら彼女自身の証言や両親や周囲の人々から得た意見を聞いても頷けるモノが多かった。

彼女は幼少の頃からずいぶんと特異な発想と行動を繰り返していたことが分かったのである。

例えば、彼女が生まれたばかりの頃。産声をまったく発さなかったため最初は死産や未熟児と勘違いされたが、子供を取り上げた医師は彼女の健康的な体重としつかりと脈打ち自分で呼吸する体調を見て、問題はないと判断した。

しかし、その後、彼女が赤ん坊になり、母親が子育てのおり、近くの公園で他の子供達とふれあいのひとときを持たせたときも奇妙な行動が発現する。

まず母親が気付いたのは他の子供達の笑顔や泣き顔の表情。それに比べて彼女はあまりにも表情というモノが欠如していたという。母親はこれまで産声を上げないのも鳴き声を発さないのも笑わない

のも、そう言う子供もいるくらいに考えていたという。彼女を産む前に長男を出産していた母親だが、その長男は未熟児で生後すぐに専用の人工呼吸器に入れられてすぐには母親の腕の中には来なかった。その時に比べたら健康的な彼女の少しの心的な異常など問題にはならないと思っただけだったのである。

そしてその時、子供達の誰かが持つてきた電池式で動くロボットの人形に他の多くの子供達は興味をそそられ群がったが、彼女だけはまったく興味を示さず独り動かなくなったセミの死体ばかりを眺めていたという。

これらは彼女の過去の興味深い症例の一部に過ぎない。彼女は成長して行くにつれて他の同い年の子供達とは異質な子供として育っていったという。そのため、両親は彼女への対応が分からなくなり足踏みする状態が続いていたとのことだ。

これらのデータから言えることはひとえに、彼女自身は生まれ出る頃より既に現在のような異常な衝動性に結びつく何かを所持していたと言うことである。

つまりこれは彼女自身の記憶や心に干渉するよりも、よっぽど根源的な位置から起こっている症状としか思えず。心理学という主観的な分野だけでの解析は難しいという結論に至る。

/ 7

マコトくん。

彼はいつつもわたしだけを見つめてくれた。いつも涼しげで何かに飽きたような目線をしていたけど、わたしを見るとときだけはとても優しい目。関心を抱いてくれる、興味を注いでくれる瞳。

愛の反対が無関心ならば、彼はわたしを愛してくれたことになる。これまで生きてきて。こんなに人から愛情を受け取ったのは初めてだった。彼はわたしを独りから救い出してくれる……。彼は・

お兄ちゃんに似ている。

それが彼に対するわたしの最初のイメージだった……。

「アオコちゃん。君の名前は木村青子だ。ダークじゃない。」

その日も目の前には白衣の老人。朝倉という名前の分析心理学者だが、そんなことはダークには関係がない。

診察場所はいつもの広間。子供達が遊び回る空間。時刻はやつぱり夕方より1〜2時間前。彼女がこの病院に半ば無理矢理入院させられてから何日経ったかは定かではない。ほとんどぼうつとしていたからはつきりしないがおそらく半年前後だろう。もはや彼女はここ常連だ。最近になってやつとまともに現存在としての感覚が戻ってきた。おかげでやつと自分の担当の医師の名前や看護婦の名前も覚えてくるようになった。以前の彼女と比べても画期的な進歩ではある。自分以外の人間の名前を覚えることは希だ。

意識も現実からの逃避を少なくしてきたおかげらしく、本を読ませてもらったり自由時間を多く与えてもらえるようになった。病院の外にも近くの森林地帯のような公園の中を監視付きで散歩させてもらえる。

「じゃあ、昨日の続きだ。なんだっけな？ そうだ、トマス・ホッブスの万人の万人による闘争に対してだったかな？」

「ええ、そうよ。社会契約論。この思想の中で十七世紀の哲学者トマス・ホッブスは人間の自然性いわゆる個性というもの、つまり万人の万人による闘争ね。それをその所属する団体に明け渡し、利害と秩序を守る盾として社会という一個体的な団体の存在を明確にしたのね。」

「そうだ、そうだったね。その社会的な枠組みをリヴァイアサン

と言ったね。」

「ええ、そう。でもそれはいわば旧約聖書に登場するリヴァイアサンにその身をゆだねて飯の平温を手に入れようとする悪魔契約に他ならなかった。」

「なるほど、たしかにここで言う集団の契約者である政府を、旧約聖書の怪物になぞらえるのはそういった隠喩が考えられるね。」

「ええ、そうよ、リヴァイアサン、それはとっても嫉妬深い悪魔なの。語源はヘブライ語の渦を巻いたモノ、とぐるを巻くモノ、つまり蛇ね。永遠を司る反面、束縛好きよ。絶対に終わらせはしない・・。」

これはつまり社会という在り方がどれだけ支配的で秩序だった雁字搦めのモノであるかを忌み訴えているものとして見る事ができる上にそれが悪魔契約ということは、その後に待ち受けるモノが代償という名の絶望的破滅ということも表しているの。はつきり言つて、この思想の背景には政治的な闇が隠されているのでしょね。」

「なるほど。」

「・・・そう考えると例えばわたしたちがのつかているこの社会の中の常識とかモラルとか秩序といったものは大数派や有権者によって定められたいわば少数派を弾圧するエゴの固まり。排他され続けた少数派達がいつか牙を剥いて世界政府を相手取る戦争を起こしかねないとか、考えられると思うの。」

「・・・それで話を戻すようですが、そのどこがキミがダークである所以につながるのかな？」

「そこよ。問題なのは・・・。」

悪ってエゴでしょ？たとえば仏教的に言えば煩惱。ついてくるのは罪と業。それらは全て衝動的であって理性的ではないわ。客観的に見る誰もかもに嫌われるべきもの。自分だけの主観そのものなのよ。

でもそれ自体が自然であることも否めないわ。自分以外を否定していかなければ人は生きていけない。まあ、それでも社会契約論の

ような秩序による大元となる個人意志の排他には賛成できないけど。

「うん、まあ、主観を悪とするのは、いわゆる性悪説的な考えだね。」

「ええ、悲観的と朝倉先生ならとるのでしょけど……。」

わたしはその悲観的で自己中心的な中に美を感じるし、それを信頼するわ。だから悪はわたしにとって正義なの。世の中の常識こそが正義という名を借りた悪だわ。

わたしはもちろんそのわたし個人の悪による罪を背負うことも忘れてはいない。わたしの業はそうね……。」

「……キミの業は？」

「……独り……かしら……。」

「……それでもキミは悪でいいのかい？」

「……わたしは……。」

彼女は最近はこの通り、ずいぶんと流暢に自分の意見を朝倉に話すことが多くなった。

しかし、そうやって話しているときも彼女の頭の中にはいつも彼が立っていた。暗闇の洞窟の中、一条の明かりが差すその方向に佇む彼のシルエット……彼女はそれを見上げ続けた。

洞窟は狭く、しかし崩れていく音が聞こえてくる。でもそれはなんと暖かく、まるで救い……。

砂漠の真ん中で出会うオアシス。喧噪な社会の荒波の中で出会う休息。暗い洞穴で見つけた一条の明かり。

もしかしたら先に言った社会契約論のようなことこそが、この出会いのような安心感の表れなのでは……とふと思ってしまっ自分に気付いて頭を振り払う……。

彼女はまるで自己正当化を繰り返すように自分の考えを朝倉に話し続けたのはまるで……自分自身の洞窟を精一杯両手を広げて守ろうとするかのような懸命さだった。

「キミはいつたい何に怯えているの？」

ある日のことだった。朝倉からそう問いかけられて彼女は放心に近い思いの裏に彼の影を立体的に感じた。

「わたしが・・・怯えている？」

「だってほら、キミは今も、震えてる。」

言われてふとして気付いた。彼女自身のテーブルの上に添えられた右手が細かく微動しているのを・・・。

孤独・・・。

ぞつとして眺めた自分の指先。その細かな振動。

その先に思い出した光景は、あの燃える教室。

朱色に染められた一室。誰もいない夏休みの放課後。自分を求めて現れた少年の、その姿に彼女が感じたモノは・・・。

わたしを独りにしないで？嘘でもいいから頷いていて欲しかった。あなたにだけは否定して欲しくなかった。間違ってるなんて言うて欲しくなかった・・・。

あなたは兄に似ている・・・。

「マコトくんは・・・彼は今、どうしているのかしら？」

知らず朝倉に向かって訪ねていた自分がいる。彼女はこれまでも心の中ではそうして彼のことを確かめていた。呼んでいた。それは彼女にとっては今に始まったことではなかったが、朝倉はここで初

めて彼の名前を知った。

「それは、新しい名前だね。その子は？友達かな？」

彼女は小さく頷いて、細い糸を切られたように徐に朝倉にマコトのことを語り出した。少年との短い思い出。短い記憶。それは短くても濃厚で意味のある日々。

終始話しを聞きに回って朝倉は眠っているようなだぶついたまぶたで細い目を隠した。

その日の朝倉との話の中で彼女はほとんど飛んでいた。過去へ。そのかつての映像に心を放心させながら話した。朝倉の質問に答える彼女の目線はうつろで宙ばかり見つめていた。それはまるで、この病院に入院してきた頃と似ている状況だった。

「ようするに彼がキミを疑いだした？」

「・・・そうね。やってはいけない。それは違うつて言ったわ。

まるでママやパパやお兄ちゃんと同じことを・・・。」

「他の人に言われてもショックじゃなかったのに彼に言われるとキミは絶望的なほど落ち込んだ？」

「ええ、もう、なにかもお終いだと思えてしまったわ。何かが終わる音がこんなに怖いモノだと感じたことはあれが初めてだった・・・。」

「キミはその少年にお兄さんの面影を見ているみたいだけど？」

「うん・・・マコトくんはお兄ちゃんに似てるわ。

顔も姿もしゃべり方も、笑ったとき少し生意気っぽいところも、そっくり。

それなのに・・・そんなところまで似なくてもいいのに・・・。」

「そんなところ？」

「うん・・・。お兄ちゃんをよくわたしを叱るの。」

わからないわ……。わたし分らないの……。」

「なにが……。わからないんだい？」

「全部よ。みんなの言ってること全部わからないわ。だつてわたしは悪くない。」

わたし達人間は終わらすのが役目なの。壊して、殺して、全てをゴミにして捨てるのが役目なのよ？だから地球中はいまや人間のゴミ捨て場みたいにゴミであふれかえっているじゃない？」

「まあ……。否定はできないね。」

「……。ガリレオだつてキリストだつて……。最初は誰も認めてはくれなかった。大数派に弾圧されて否定ろされていった思い。」

わたしのはそれだわ。みんなに間違つてゐるって否定される……。」

「……。」。」

「きつと……。違ふところにいたのね。」

彼女の脳裏には兄の自分へ言つた最後の言葉が思い出されていた。

—— 違ふ、違ふんだよ。みんなが

おかしいんじゃないよ。きつとおまえ一人がみんなとは全然違ふ所に居るんだよ。 戻つておいで……。 戻つて……。おいで……。」

アオコ……。戻つておいで……。

遠い記憶の中。

その日、五年生の終わり、春休みが開けたら六年生になるアオコは、父の仕事に付き添つて母と兄と一緒にシカゴに居た。

そこには大きな遊樂園があり。両親はそこへ五歳年上の兄に彼女の面倒を見るように言いつけ、自分たちは仕事のために兄妹の元を離れた。

彼女は何をしたんだろう？なにかまたいけないことをしたのかも
しれない……。兄は遊樂園の中にある一つのビルの非常階段で彼
女を叱った。

優しいお兄ちゃん。しかり方だっていつもまるで慰めるように諭
すだけ……。

それでも……。兄は死んだ。

死ぬべくして死んだ。

最後に覚えているのは、非常階段の柵から後ろ向きに落ちていく
兄の姿。その驚き助けを求める眼差し。

どうして……。分かってくれなかったの……。お兄ちゃんの
・・莫迦。

「お兄ちゃんは……。だから死んだの……。」

「？」

「死ぬべくして死んだの……。」

「何を言ってるのかな？お兄さんがどうかしたのかい？」

「しかたなかったのね。死ぬしかなかった……。」

「……。」

「だって、わたしは悪くないもの……。」

無駄だった。それから朝倉が何を訪ねても彼女は、悪くない、悪
くないを連呼するばかりでまるで会話にはならなかった。

【朝倉誠二の調書】？

最初に彼女の精神方向性でもっとも特徴的なモノは何かを告げて
おこつ。

それは先の兄の事にかかわらず、全ての論法が自分自身を正当化し守る方向に向けられているところである。自己正当化とえば全ての人間は少なからずそうであるが、彼女の場合はこれがあからさまなほど強く、健常者ではまずいないと断定できる値に達している。そしてそれに理由づけるように彼女は自分が周囲から否定されているという強い被害妄想を持っている。

そしてそういった彼女の思考回路の中で、特筆すべきは彼女はほとんどの人間の言葉に耳を傾けることができないところである。

度重なる彼女との問答の中でやっと引つかかるモノを発見した。その中で注目すべきところは、心理学者である私でも開けなかった彼女の心を開いた二人の人物の存在である。

一人は同じ小学校に通っていた同い年の少年、琴乃葉真琴。もう一人は彼女の5つ上の兄の木村黒斗である。

マコト少年について調べるのは容易かった。彼は私の勤務する大学のかつての生徒であった阿乃連枝が、例の事件でショック状態にあった彼を担当していた医師だったのである。

そして兄の黒斗についても調べると、彼は春先に父親の仕事を不慮の事故にあって転落死をしていることが分かった。

木村青子は兄の死に対して自己肯定を思わせる証言を繰り返したところを見ると、それは罪悪感の裏返しととることができる。この部分は謎である。

少なからず分かることは、マコト少年と兄の黒斗に対する木村青子の思いは、特別に大きなモノで、彼ら二人だけには彼女は認めてもらいたいという認識をもっていたことがわかった。

わたしはこれまでの彼女に対する診療から、度重なる分析の末、一つの仮説をくみ上げた。

ダークの思考回路を六つの連立する要因に分けるために逆戻しで

追うところなる。

【表因】命を見るととりあえず殺したくなる衝動がある（アオコはこれを終わらすと形容する）

←
【因】終わらして行くことが自分の使命と感じているから。（理性的、正当性、使命感）

←
【因】人間否定、生命否定、自己否定の価値観が備わっているから（趣向性、思考性）

←
【因】孤立感と人間不信、人の話が許容できない感受性を持っているから（性格）

←
【因】人と感覚があまりにもずれているから（感覚）

←
【因】モノが終わる瞬間に強い好奇心と嗜好を感じるから（興味的快感的感受性）

←
【原因】それは「???」だから・・・。（最大自己肯定理由）

この「???」に当てはまるモノこそを私は彼女をこのような心理状態に追い込んだ張本人と見ている。

そしてこの「???」の正体を私は「脳障害」ではないかと仮説だてた。

理由は彼女の症状の中で一つだけ類推できるもので感情表現方法の欠陥部分に笑いや泣くということさえうまくできないという箇所、および人の気持ちや言葉を理解できないという部分があること。これが一種の先天性の自閉症などと共通性があると見たからであると同時に、彼女の症状がそれ自体、時折軽犯罪や猟奇的殺人事件の

犯人に見られる脳みそ自体に先天性にあつた軽度の障害というタイプに酷似していると気付いたからだ。

つまり彼女の場合、普通の未成年者の性的サディズムとは色を逸し境界性人格障害などの診断では推し量れない部分が多い。それは彼女のような患者自身が何故、そこまで自己正当化を繰り返すことができるのかという問題を上げたとき、それに対して人間とは単なる心的なトラブルでは解決できないほど受動と能動のバランスを自分から崩すことは普通できないという法則性を破るものだからだった。

/ 8

よく彼女は目を開きながらにして夢を見る。

それは洞窟。いや、というよりアナグマの巣の中といったほうがわかりやすい。そんな狭いほらあなの中に詰められている夢だった。暗く、まるで自分がモグラにでもなったように何も見えない闇。身動きもとれず匂いさえしない……。音も聞こえない。

それはひとえに孤独と形容できる場所。

彼女はたった一人その中で生き埋めになっていた。そしてそこが彼女の生まれた場所。

彼女の世界は始まったときから闇だった。

誰もどこにもいない。だれも何も分かつてはくれない。そして誰も分かることができない。

だから彼女は悪くない。

彼女はずっとこの中で自分にだけ話しかけていた。すごく小さい頃からずっと。人間が一人だと知っていて、独りで生きていけると本当にそう思っていた。

そして独りでよかった。

その証拠に普通の人間なら発狂して乱心するであろうその孤独な

状況。

たとえるなら出家して人里離れた山の中、洞窟の奥深くに籠もった独りの仏僧。籠もって3ヶ月もしないうちに仏僧は孤独にさいなまれ土で固めて作った人形をあたかも生きた人間のように扱って独りしゃべりを初めて次期に死ぬ。

たとえば孤独な青春を送っている独りの不器用な少年。彼がどんなに見ないようにしても学校に行けばテレビを見ればネットを開けば嫌でも外の世界は明るく眩しく彼の暗がり生きる目を眩ませる。彼は憧れて外の世界を渴望するだろう……。楽しそうにコミュニケーションをとっている人々。その手の届かない微笑み達に彼は強いあこがれのようなものを見るだろう。

どのたとえも、常人ならではの苦痛。

しかし、彼女においては苦痛ではなかった。むしろその中こそ彼女にとって胎盤の中のように安らかな故郷。

彼女は孤独を孤独と認識したところで痛くもかゆくもなかった。むしろ独りで生きていける自分を失いたくなかった。

なのはどうしてだろう？

いつからか彼女の夢の中に出てくる洞窟には一条の小さな明かりが差し込むようになった。それは今までに見たことがない洞窟の出口。白い光が包み込むその場所に独りのシルエットを見た。

兄ではない……。兄ならばそんなに彼女の中に入ってくることではできなかった。兄ではない誰か。彼を知ったときから彼女は孤独を感じるようになった。彼が彼であって、自分とは違うのだと知ってしまったときから、何かが繋がって離れなくなってしまった。

それはまるで盲目の雛鳥の目に突然明かりが射すようなもの。それまで飛び立つ空さえ知らずに生きてきた雛鳥に空の恐怖を教えるようなモノ。そして雛鳥の翼は折れて使い物にはならないというのに……。

それは切なくて。胸が苦しくて。手を伸ばしたくても届かなくて。まるでジレンマ。まるで悲劇。

きつと他人という存在を知ること・・・それは・・・

だれも独りでは生きられない。

脳裏に打ち付けられるような彼女にとって意味不明な言葉。

それが、孤独なのだと知りたくはなかった。

独りという言葉は知っていたし。自分がそれをすごく普通のことなのだとも理解していた。それなのに・・・それを否定されてしまったら、いや、それを受け入れてしまったらきつと彼女は彼女じや居られない・・・そして受け入れる方法も無かった。

彼女は知っている。自分の中に何か重要なモノが欠如していることを知っている。だから不可能だと知っていた。だから知らなくて良かった・・・。

なのに・・・

なぜ？

なぜ？あなたはわたしの前に、現れた？

「・・・なぜ？」

気が付くと彼女はそう呟いていた。そんな彼女をとなりでキミコという看護婦がキョトンとした顔で小首をかしげてみている。

「アオコちゃん。これから予定通り検査で少し疲れるけど・・・大丈夫？」

心配そうにキミコに訊かれて彼女はふいに頷いた。まだ意識は少し遠く、解離していた。

ここがどこだかを思い出すのに数秒を要した。白い壁。そう、自分の入院する病院。

病院に入院する患者とはどういう人を定義するのだろうか？

ふとそう思った時。普通じゃない人間。異常な状態。という在り

方がまざまざと首筋から脳にかけて駆け上がった。

わたしはどこに居ても否定されている。

彼に出会うまでは当然のように受け入れていた事実。それに小さな苦しみを感じ始めていることに気が付いてきていた。

確かめたい。彼にあつて確かめたい。そして終わらしたい。そうしなきゃわたしは、もう生きてはいられない。

深い決意。もはや一命をかける行動。彼女はもう一度少年に会うことを胸に抱いて、その日、脳の精密検査に挑んだ。

MRI及びfMRIなどの器具まで動員され、彼女は数時間の検査を行った。

たとえその結果が、脳に損傷があるということでも彼女は検査が終われば、家に帰れるモノだと思っていた。

誰も一人では生きられない……。

ポツリと窓辺に雨がしたたる。深夜の病棟。彼女は暗く病み沈んだ一室で目を覚ました。

徐に立ち上がると独りきりの部屋の中、人気をはばかるように壁や窓の外、ドアのほうなどを確かめてから一息をついた。

行かなきゃ……。

彼女は患者用のサンダルに足音を発さないように軽く体重を乗せ、歩幅を短くする。早足でドアに駆け寄ると、昼のうちに看護婦の目

を盗んでポケットから奪っていた部屋の鍵を鍵穴に差し込んだ。

カチャリ……。

鍵の開ける音。それでさえ、うるさく聞こえるほど病棟内は静かだった。寝静まる闇の中、彼女は病室を抜け出した。

幸い、夜は夜。どんなに異常な患者達でも寝静まる。どの病室も明かりはついてなく、廊下も節々にある点滅ライト以外は視覚に頼りになるようなモノはなかった。

下へ降りるとき、エレベータは使わなかった。深夜でも夜勤の職員が起きていてエレベータは動いているだろうけど、それだけに危険だ。彼女は病棟の端にある非常階段を伝った。

しかし、この時彼女は大きなミスをした。この病院の外側にある階段。そこへ向かう非常階段の入り口を開くとセンサーが察知し、それを警備室へ伝達するなど彼女には知らされてない仕掛けだった。おかげで全ては茶番に終わった。

6階分の階段を下り終えるとそこに待っていたのは暗闇の病院裏手の駐車場。

でも次の瞬間にはまばゆいライトが彼女の顔を照らした。

警備員に見つかった。

最初は気味悪そうにライトで彼女の顔を照らしていた警備員もすぐに患者の白い服を着ている彼女に気付いて、保護しようとした。とつとめた。

しかし、彼女はあらがった。反転して逃げ出した。警備員の追ってくる音が聞こえる。呼び止める声が聞こえる。

それでも振り返らなかった。彼女の頭の中にあるのは一つ。

行かなくちゃ……。あなたに会いに行かなくちゃ……。

脳裏によぎるのは洞窟の入り口。少年のシルエツト。彼に確かめなければ行けないことがある。

彼女は走り続けた。病院の外は思ってたとおり、森林に囲まれていた。彼女は病院向かい側にある森林を使った公園を横切りその向こうの森林地帯の出口に向かうであろう道路に沿って走り続けたかった。しかし、追っ手を振り切るために彼女は深い森の中へと向かうことを余儀なくされた。

足はいつの間にか素足。履いていた患者用のサンダルは途中で脱ぎ捨てた。走りにくいからだった。でもそのせいで足の裏にいろいろなブツブツが刺さる。痛む。きつと切れて血が出ている……。

それでも彼女は必死で走り続けた。

もう3月に入る真冬の深夜。周囲を高い木々に囲まれたそこはとても気温が低く、彼女の走り続ける吐息は白く湯気を上げていた。

右も左も闇一色。視界は1メートルほどはつきりしない森の中をただひたすら走り続けた。しかし彼女にとってそのぐらいの闇は恐怖の対象にもならなかった。

行かなくちゃ……。

ただそれだけを胸に抱き、後押しをされるように走り続けた……。

自分でも思った以上に身体がなまっていた。どれくらい走っただろう。追っ手の足音も聞こえなくなった頃、彼女は立ち止まった。気が付いたら、自分が今、何処にいるのかさえ、分からなくなっていた。

目的地だけははっきりとしている。でもそこに向かうすべも力ももう彼女には残されていなかった。

しだいに足が疲れ果て膝を屈する。同時に寒さがあつという間に動かなくなつた身体を凍えさせていく。体中の体温がどんどん奪わ

れ、彼女の感覚は麻痺して、落ち葉がつもる木の下で心地よい眠りの中に誘われていった。

行かなくちゃ……。

そう思いながら……彼女の意識はだんだん狭窄していき、そのうちには深い眠りへと引き込まれていった。

彼女が凍死寸前のところで発見されて保護されたのは翌朝間近の捜索隊によってだった。

まず、すぐに集中治療室に入れられて、弱りきった身体を治療されると、またあの部屋に戻された。

固く閉ざされた部屋のドア。もう二度とあんなチャンスが訪れないことを告げているように感じた。

そしてその脱走事件からまもなく、朝倉医師はいつもとは違う時間に彼女の診察を行った。しかも、今度は彼女の病室に朝倉医師自身が赴いての一对一の診察。

それが何を意味しているのか……この時、彼女はまだ分かっていなかった。

いや、きっとそれを分かったとき、彼女はもう彼女ではいられないと……そういうことだったのかもしれない……。

/ 9

見つけたのはあなた
でも先にハマったのは
わたしのほう……。

朝倉は彼女をベッドの上に座らした。そして繰り返し質問をした。その質問は今までとはおもむきが違った。

今までなら彼女がしゃべり出すまで関係無い話題からなるべく聞き手に回って問答してきた朝倉だったが今回はある意味好戦的だった。好んであることに会話の視点をしばって来た。

それは、兄とマコトについてだった。

最初に朝倉はマコトについて、彼がわたしとの事件で傷ついてショックを受けて気に病んでいると話した。でもそれはわたしの耳には届かなかった。逆にこう思った。

わたしたちの関係を誰に理解されたいとも思っていないわ。

朝倉はすぐに彼女の反応の悪さに気が付きマコトの話題をやめた。それからはずっと兄の黒斗の話題。そしてその話題は彼女にとってとても強力な引力を持っていた。まるでブラックホールのように重々しいモノに引き込まれていくような、闇・・・を感じた。

朝倉は最初、兄の黒斗は若くして死んだのは可哀想だと同情した話から始まった。そしてそのうちには

「キミはいけないことをした・・・。そうだろ？一人娘にそんな悪いことをされてキミを大切にしていたお父さんはこんどこそ悲しんだらうね。」

わたしは頷くしかなかった。

たぶんそうなのだろうなと・・・今なら何故だろう少し分かるのだ。あの人達の気持ちとやらが・・・。

パパはわたしが好きなのよね。きつとママに似て綺麗だからね。だからパパは周りから見て変な性格をしたわたしにも優しくしてくれた。でも、それは人一倍、変な私の行動に気を病んでいたのもた

しかだと思う。

そう思うと、なんだか知らない感情が心の底をノックする音が聞こえる。彼女は知らない……。その感情がなんなのかうまく理解することができない。でもたしかに、感じる。

まるで、自分が自分でさえなければと感じるような、すさまじい自己嫌悪。これはいつたい……。

そうして朝倉の術中にはまっていった私に朝倉は次にママについて言った。

「一人息子に、しかも最愛の我が子に死なれてお母さんはさぞ辛かったろうね。黒斗君。彼はお母さんの夢の塊のようなものだったもんね。可哀想に……。」

そう……。ママは兄のことにたくさん手をかけていた。兄の勉強、兄の留学先、兄の生活の全てをママはいつも心配していた。ママにとって兄の黒斗は、そう、自分の人生のようなモノだった……。

彼女はうすうす気が付いていた。

自分は死者に哀れみは持たない。でも知ってしまった。終わった後に取り残されるモノの心境を……。大切なモノを失ってしまう悲しみをわたしは知ってしまった……。

たぶん……。確信はないけど。朝倉はそんなわたしの新たな特性に何かを仕掛けようとしている……。

人生で初めての自己嫌悪。そこから朝倉が摘み取ろうとしたモノを彼女はまだ知らない。さすが心理を扱うプロとでも言おうか、心理療法士ともなるとすさまじく正解を外さない心理誘導で彼女の心に深い穴を穿っていった。そして彼女が沈みきり、深い闇の底につ

かりきつたとき、朝倉はおもむろに彼女をベッドに寝かせた。そして静かに呟き続けた。

「それでもキミは悪くない。悪くないよ・・・ダーク・・・みんなには悪いけど、キミは悪くない。」

わたしは・・・悪くない・・・の？

まるで子守歌のように朝倉のその言葉が連呼され・・・わたしは自問自答を繰り返し。終わりのない闇へと誘われていった。

眠ったのだ・・・。深い眠りについた。次に私が目を覚ましたのは一週間後・・・。わたしは知らぬ間に病院を退院していた。

誰かがわたしの身体を使って喋っている、思っている。わたしの脳や身体をわたし以外の誰かが使っていた。

気が付いたときにはすでにわたしは占領されていた。

彼女たちはわたしに気付かない。

それはアオコとクロトという二人の兄妹だった。

わたし達一家はあの事件はもちろん今までのわたしの人生を避けるように金城の屋敷を去り、都外のほうの小さな町へと引っ越した。そこで心機一転。木村青子の新しい人生を両親は設計し始めた。もちろんわたしは蚊帳の外。仏壇に飾られて線香をたてられているわけでも無いのだから、もはや存在自体が無かったことにされている模様。

正直、苦い気持ちが胸をよぎった。こんな時、自分がそう言った感情に疎いと言うことに感謝しなければいけない。

木村青子の心の中でわたしは映像だけを見せられて自分で自分をコントロールすることは許されなかった。

まるでいくつもの鎖で玉座に絡みとられたような束縛感。それで

もいつかはそんなまがい物の二人はわたしの内から綺麗さっぱり消え去って本物が復活すると信じていたのは、またわたしの正義と悪論法というか・・・まるで子供じみた妄想だった。

あの二人はたしかに生きていた。まがい物などではなく本当に二人とも人生を送っている。

その証拠にクロトには悩みがあった。

新しい木村青子は二重人格障害者。しかも完全に解離しているらしい。クロトとアオコはお互いの存在を直接的に感じ取ることはできなかった。二人が自分たちの存在に気づき始めたのは二人が生まれてから間もなく。自分の部屋の様子が、あるときは少女趣味に代わっていたかと思えばあるときは少年主義一色に染められていたときとか、身に覚えのない活動の痕跡から、あと一番大きかったのは、中学校の友人達の囁きだった。

彼らは木村青子が解離性同一性人格障害だというのは知らなかった。だがその代わりに性同一性障害であると認識していた。これは木村青子の性別が女なのに対していつも学校に行っている主人格が男のクロトだったからだだった。そのため、学校の友人達はクロトのことを遠回しに批判した。どんなに正義ぶっても人間は所詮人間。ボロは出る。学校側からの対応でなるべくクロトの傷に障るようなことは避けていたつもりだが、それはじわじわと弱火であぶるようなものだった。クロトは次第に周りの揶揄する声や遠回しな皮肉に耐えきれずに学校を休みがちになっていた。

二人はそんなある日別々に、両親に迫った。

まずはクロトが・・・引っ込み思案な彼はもはや学校では肩身が狭く生きていけない。それを両親がなんとか学校に行くように説得をしている最中、話が横道にそれた。その時にクロトが自分の中の性同一性障害だけではかたづけられない矛盾を打ち明けた。

両親は深刻そうな顔をしてしばらく黙っていたが次期にクロトに真実を語り始めた。

その中にももちろんダークに関することはなに一つ話さなかった。

もうダアクという存在はいないものとされているのだから当然だ。両親が話したのは、木村青子が心に二つの人格を抱えているということだった。

順を追って同じ話はアオコにも聞かされた。二人は強い葛藤にさいなまれた。二ヶ月ほどだろうか？二人は学校に行かずに、部屋に引きこもった。両親はもはや諦め半分。医師の朝倉に事の次第を伝えて、朝倉を家に招いた。

久しぶりの朝倉の顔。あの時わたしをこんな闇の底に追いやって以来の出現にわたしは老人のたるんだ顔の皮膚をもっとひっぱって引きちぎってやりたいほどの怒りに襲われた。それが患者のクロトにも伝わったらしく、朝倉に対するクロトの持ったイメージはなんとも最悪のモノだった。

朝倉はお手の物といった感じで、まったく面白くない対策を終わらした。それは今まで主人格だったクロトを裏にして、主人格にアオコを持つてくるというモノだった。

二人の生活リズムにもルールを作った。女性であるアオコは暗くなる前に早く家に帰らなければいけないという常識を使つて、午後6時から朝方の6時までの十二時間をクロトの時間。そのほかの太陽が出ている時間をアオコの時間とした。

わたしは内心クロトに同情した。クロトのその状況に自分に近いモノを感じたからだろう。主だったわたしが無理矢理闇に押し込められるなんて……。まるで先住民に対する侵略のようなモノだわ。人類の暴挙だわ……。

しかし、朝倉の方法は正しかった。アオコは中学校で普通の女の子として懇切丁寧に木村青子を周囲の人間に振る舞った。アオコは何一つ落ち度のない少女。クロトは何一つ落ち度のない母親の楽しみ。この二人のおかげでこれまで家庭でも外でも問題のあった木村青子という存在はまったく真逆の完璧な存在へと昇華されていた。わたし……ダアクを一人残して……。

一年ぐらいそうして二人の人生を見てきただろうか……わたし

は次第に自分が消えていくのを感じた。

最後に一度だけでも彼に会いたかったという思いが強く未練を残す。まるで成仏させられていく地縛霊のようにわたしは世界にしがみついたが・・・ダメだった・・・。

どんどん、どんどん、闇の底へと落とされていき。視野は狭まっていき。わたしは日に数時間が眠りについて意識を失うが、その眠りもずっと深く長くなっていった。

彼女は知った。

クロトとアオコの二人は、ちょうど後ろ向きにまたがったシーソの様。二人はお互いを背中合わせにしてお互いの記憶や感情すなわち視界をまったく共有しないでソレなのにお互いを動力にして動いている。きつとわたしはその真ん中。二人共が絶対に見ない後ろ。二人の間にある軸。そこにわたしは定められてしまった・・・。

そう知ったとき。わたしはあの風景の中にいた。

深層風景・・・そう言えばいいのだろうか。わたしの中に生まれたときからあったその景観。

ほの暗い穴の底、わたしはアナグマの巣のように狭いその穴の中から、一条の光を見上げている。神秘的ですごい怖い光。目が眩んで、心も眩むような眩しい色。

誰かが立っている。シルエットがかすかに見えた・・・。

彼のあの肩を抱くような優しい眼差し。ふと見せる遠い視線・・・。

。

マコトくん・・・もう一度だけあなたに会いたかった・・・。

わたしは消える。

遠く闇の彼方。誰も抜け出せないあの神秘の中に・・・

わたしは消える。

クロトとアオコ、黒と青という二つの板に洞窟の蓋を閉められて、わたしは完全にシャットダウンするのだ・・・。

あ、そうだ。消える前に、一つやり残したことがある。
キミにお別れを言わなくちゃね・・・。

「さようなら、何処の誰かは知らないけれど、ずっとずっと私を見ていてくれた、あなた。気付いてたわよ。またいつか会えるといいわね。」

さようなら・・・。

そして、あなたは・・・
だれ？

すさまじい風圧が彼女の中から俺を吹き飛ばした。俺は意識を失うような吹き飛ばし感覚とともに・・・どこかへ飛ばされて・・・再び意識の狭間へとその身を落とした・・・。

俺は・・・どうすればいい？彼女のこの悲しみに答えられるのだろうか・・・。

一人、闇の中で座り込んでそればかり思っていた。彼女の全てを知ってしまった今、俺はどこへ行けばいい？

どこへ？

明るい暗闇の中。右も左も上も下も無いような暗闇の中。彼女の脳裏にあった深層風景を思い出す。

ダークはずっとここに居た・・・。生まれたときから、闇だけが彼女を包んでいた・・・。

何かが俺の中で思いとして固まっていた。

彼女のあの無表情な方の本当の顔を思い出すと、泣けてくる。

あの子に俺は言わなければいけない。

今度ははっきりと、面と向かって、彼女に言わなければいけない・

……。きつとそれが彼女の孤独な心に、あと一押しで真実を与えられるのだと、信じたい……。そして今度は絶対に忘れない。

いつも夢の中、覚めたら失っている大切な記憶。俺は二度と忘れない。忘れてたまるか……。忘れて……。

その決意のあと、しばらくすると全てが白んできた。まるで夜明けのように世界は開けていき……。今まで俺が見ていた暗闇はまぶたの裏側の暗闇なのだと認識して眼球が微動する……。

瞳を開けるとそこには、黒縁眼鏡の無害そうな心理学者が一人、眺めるような眼で俺の目覚めを待っていてくれた。

「おはよう……。マコトくん。」

目が覚めた暗いマンシヨンの一室。

目の前に座る心理療法士。そのリアルな風景と共にこれまでのリアルな方の経緯を思い出し、同時に夢の中での出来事も脳の中で再構築されていた。

そして

俺は……。忘れてはいなかった……。

【朝倉誠二の調書】？

私は間違っているのかもしれない。

人の本性を、その個性というモノを彼女、木村青子のようにいうなら、守るべき対象であると私もそう思いたい。

しかし、彼女は危険すぎた。そして先の脱走事件で彼女における信頼に余地が無くなっていった。彼女の両親はこの計画に強く賛成を述べた。それで娘が普通に戻れるのならそうするべきだと言ってくれた。

しかし、私は迷っている。

本当に私はやるべきなのだろうか？

彼女の脳はたしかに損傷をおっていた。先天性のモノだ。脳幹が変形していて、脳神経幹細胞が脳の一部、側頭葉と海馬付近で広範囲にわたって偏りのある分布を示していた。これが彼女の偏った思考回路を形作る原因となったのだろう。

しかし、それが彼女自身の塊とは言えない。それでは彼女の人生で培っていた価値観というモノが最初から決まっていたというようなモノだ。

ようは血液で性格が左右されると同じようなモノ。たとえば血液の濃度が濃い人ならば脳の血流が緩やかなためおだやかでのんびりした性格になりやすいし、血圧の高い人ならばその分、短気な性格を持ちやすいといった程度のものなのだ。

つまり彼女の場合は普通に脳に損傷のある自閉症患者などよりもずっと軽度な障害を持っていたためにそれほどシグナルも発さず健康的な人間として世の中に生まれた。しかし、その裏では彼女の脳みそでは世の中にある多くの存在に対する受け取り方を常人と同じように学ぶことはできなかった。結果が今のような性的サディズムのような嗜好を生み、それとともに自分自身が誰の言葉も理解できない反面、誰にも理解されないと言うことに強い孤独感を感じていた。

ならば、彼女のその記憶と培った価値観を全て上から塗りつぶしてしまおうという結論に至ってしまったのはいまだに是非が問えない。

私が考案した治療方法は、本当に心理療法と言えるモノなら決し

て許される方法では無いのかもしれない。

このプロジェクトはようするに、元あった人格を人工的に作った人格により、上から塗りつぶすというなんとも安直な方法論であった。

これは、元々、解離性同一性障害（DID）という、いわゆる二重人格だが、その病状からヒントを得たモノで、いわば解離性同一性障害の患者が辛い過去やトラウマを払拭するためにもう一つの人格を作ってその人格に苦痛の部分を負わせるという発想から転じて、過去を隠蔽する無意識的な効果を期待するモノである。

ただ単純に無意識に記憶を封じるだけだと彼女の場合それは膨大な量になる上に何よりも、彼女の無意識を信用することはできなかった。ならば、こちらで操作して彼女から引き出した二つの在り方を増幅させ、その二つに彼女の本心に戸を閉ざさせれば完璧すぎる隠蔽だった。

しかし、私は今になって後悔している。人間をその本心を闇に封じるなどと言うのはまるで人殺しも甚だしい……。

だから阿乃連枝、キミに遺す。彼女は次期に作られた薄皮を破る。後のことはすまないがキミに任せる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6245i/>

B&B 第0章 五章中編

2011年1月26日02時53分発行